

六十 賣國奴呼ばはりの名案

賣國奴呼ばはりをされることは世界何れの國だつて好い氣持を以て迎へられる所はあるまいと思ふ。殊に支那では此の呼び方は最も人の耳に深刻に感ぜられ最近の如く新しい思想で不平等條約の撤廢の、租界の回收のと云ふやうになつて來た際のことゝて、多少でも外國に迎合する如き舉動を取てするものがあると忽ちにして此の一言で世間から葬り去られるのである。

されば假令眞の國際協調の意味から、外國に愛嬌を見せることの必要がある場合であつても、反對側からは必ずや賣國奴の言葉で之を攻撃しようとする傾向を見るのである。以前まだ國民一般の自覺心を刺撃してゐなかつた時代には、國土の一部が割讓されようと租界が取られようと領事裁判が決定されようと凡て皆易々諾々であつた。然るに近來輿論は高まり、國論は湧き、常にその言ふ事が國家觀念から出發して列國に多少でも頭を押へられる如き方面へ口を滑べらせるとか、又民族間に面子の穢された如き氣持の生ずる場合には、以前のやうに我慢して差控へてゐることはしないで、

寧ろ列國を向ふに廻して八釜しく騒ぎ立て、迎合主義など取つた人間に對しては賣國奴呼ばはりをなし、叩き潰して了はなくては濟まさぬと云ふ意氣を示すのである。

又從來の如く支那人にして祕密の地圖を他國人に賣り飛ばしたり、或は又領土の一部を外人に買収されるやう盡力したりすると云つた非國民的の大罪が行はれると云ふことは今では見られなくなつたのである。これらは寧ろ國家觀念の足りなかつたことや又世界列國に對して深き智識を有しなかつたことその爲めに用でたものであらうが、今後の民國には斯ゝる行動は見られなくなると思ふ。但しこれはまだ絶對的ではないから保證の限りではないのである。

清朝の末葉に滅滿興漢の思潮が高まつて來て以來、民族的自覺心の勃興は著しきものがあつた。此の輿論は大勢であるから最近かの張作霖の如きも滿洲の天地にあつて常になるだけ反日本的行動に見える態度を取つてゐた。それと云ふが多少でも日本と協調の態度を取れる場合にはすぐ賣國奴呼ばはりをされるのが苦しいからである。此の一事に依つて見ても、たとへ心中如何に考へて居ようと、自己の地位擁護の爲め此の汚名を蒙らざる様努めてゐたことは明かなことである。これは

公人としてよほど必要なこととなつてゐるのである。今や支那の輿論はすべてこの賣國奴呼ばはりをさへ振り廻はして之で脅かしてさへ居れば、新國民の勃興は期して待つべしと云つた空氣を作るまでに至つたのである。民國がかくの如きところまで漕ぎ付けて來たと云ふは大勢でもあるが三民主義の主張宣傳にも大いに助けられたことと思ふのである。

六十一 阿片獎勵の魂膽

支那は學毒、煙毒、字毒、の三大害毒の爲に從來とかく悩まされ既に清朝の如きもたしかに之が爲め遂に滅亡したと云はれてゐるからである。殊に科擧の試験や文字文學の弊とはちがつて其中でも阿片の煙毒は最も深刻に現れて來るのである。其の結果拒毒會が創設せられ、阿片を口にする者は社會から葬むられる位の空氣をまで作るに至つた。しかし永年支那民衆の嗜好に深く喰ひ入つてゐる阿片のことゝて上流の家庭は固より、宿にも船にも之が備へられ、事實上は阿片なくては支那人の日常生活はやつて行けない程度に在るのである。

其の爲め地方に依つては之が地方の財政難を救ふ唯一の方法として、事實上阿片の奨励を見る形になつてゐるところがある。北支那地方に於ては、北軍の爲た民國十七年の春のことである。その二月二十八日の法令で以つて直隸、山東方面には罌粟の栽培を認め、一畝に就いて八ドルづゝの課税を見るに至つた。其の結果兩者に於ては年額二十萬元の増收を得ることゝなつた。表面の名目はロシアから這入つて来る共産黨を撲滅するに要する軍費である云々と稱してゐるが、それは名許りの形式に過ぎないのである。

その他滿洲、河南、四川、貴州などと、罌粟の栽培の盛な地方は頗る多い。阿片の製造と云へば極めて簡單であつて、殆んど各所自由に製造されてゐるのである。そこでその煙毒の弊の方からどうしても之を飲む分量の上に制限を加へるか又は絶対に禁止するかどこゝに考ふべきことゝなるのである。我が臺灣では阿片吸咽者には年齢により一定の制限方法を立て、毎週その量を越さない程度に許可してゐるのであるが、支那ではさう云つた規定はない。寧ろ地方増收の財源として之を奨励してゐる形になつてゐる位である。

一方に拒毒會の奨励さるゝ機會のあるのに對して、一種矛盾の甚だしい現象に見えるのではあるがこゝに財源の問題から阿片を奨励なりとしてやらなくては事實財源難は救はれない所にまで來てゐるのである。けれども、元來阿片黨の日常生活を見ると爪が茶色に染まるまで、朝夕煙管に阿片を詰めて、之に耽溺してゐる事實がある。それから見ても、阿片なくては一日も凌ぐことが出來ず若し之を中止してゐれば中毒のものは遂に總身瘦せ衰へて、そのまゝ斃れる迄に行くのである。どうしても永久止められないのである。それ故事實上その點から云つても阿片の根絶など行はれる譯のものでなく、むしろ之が奨励の形を取るに至つたと云ふのも事情止むを得なかつた譯であらうと思ふ。

近來民國の青年達は自分たちの前で之を口にすることさへも恥ぢてゐる様子であるが、民國の大多數はあの香ばしいよい風味とその生理的効果の心持ちのよいことからして阿片なくしては夜も日も明けないのである。こゝは丁度酒以上嗜みの問題となつてゐるが恐らく支那民族の有らん限り、阿片はその趣味的方面から、支那民族を養つてゐるものと見ても差支へないのである。國家が之を犯罪

視してゐてもそれは法律上の問題である。趣味の問題は法律を超越してゐる許りでなく、とかくこれ迄は政府部内の役人自ら之に耽り、某大官の如きは日本に遊び度いが阿片禁止國だから渡日を中止しようなどと云つてゐたものもある。漢治萍の中心人物某氏の如きも、その爲めに重大な要件を犠牲にして遂にその來朝を思ひ止まつたと云ふ事實もある位である。日本に來てゐる神戸横濱、長崎あたりの連中には氣の毒に思ふのであるものがある。

六十二 阿片密輸入の公行

支那から日本へ歸東しいつものやうに自分が支那服姿で、神戸横濱に上陸しようとする税關の役人達から服の胸部を手で押へられるのである。そして阿片煙草は持つてはゐないかと、とがめられる。最近には或る支那紳士が外套の毛皮の裏に、金時計三百餘箇を忍ばせてゐたのが發覺したとか云ふ事實があり、又支那玉子を箱詰の荷物にして陸上せし際、多量の阿片を其の中に隠してゐたとか云ふ事實もあり度々否ばしからぬ祕事を耳にすることがあるのである。

支那人と見誤られて阿片の有無を尋ねられるのも自分としては無理がないと、苦笑したのであるが最近又某國人が將棋盤の中にピストル七挺を忍ばせてゐた話とか支那酒の瓶の中に阿片をかくしてゐた話とか斯う云つた小規模の密輸入談は耳にたこの出來るほど聞かされてゐるのである。

之れに反して支那大陸に渡るときは彼の地ではどんな談柄があるかと云ふに流石は大國だけに、それは大規模の仕掛で素張らしい事が行はれてゐるのである。と云ふのは印度方面から來る綿花の荷物の中には假裝された他の品物がどうかするとどつさり混つてゐると云ふ事である。其の中には大的に阿片の貨物が混つてゐたり、時には船一杯阿片のみの登載されたものが長江へ素通りして遣入つて來る等話の様な大袈裟な事實を、誰れ云ふともなく聞かされる事があるのである。

それがために某大國は漢口江岸に堂々たる大ビルディングを建築し得て武漢地方では阿片で建つた宮殿であるなど稱するものもある位である。事實の真相は兎も角も斯くの如くにして阿片に依つて、姦商が姦吏と共謀して、恐ろしい犯罪行爲を平氣で要領よくやつてゐる事は永年ゐる日本人共の間に常に噂に上つてゐるところである。西人は決してかゝる祕事を口外するやうなことはないの

である。

併し事實は如何とも成す事が出来ない。いくら法律で攻め立てても阿片問題ばかりは遂に根絶するの機会がなく誰れ人からでもどんく輸入されてゐるのである。

支那青年は支那の阿片は外國から之を輸入するのであるから、外人に罪があると云つてゐる。しかし近時支那内地に於けるその産額は、素張らしいものである。そして内外双方からの阿片の分量は年一年と減るどころではなく、之が益々國民を狩りて癮者たらしむる結果となり阿片萬能の世を實現しつゝあるのである。

中國人を税關におくときはかうした阿片の密輸入が防ぎ切れないと云ふ聲があり又色々事情から外人を多く入れることにした。しかし外人では其の給料も莫大に上るばかりでなく中國の面子にかゝるなどと云つて一時は之を支那側で専ら取り扱ひ支那人のみにしようと思ふことで中國人のみの役人を採用した事もあつた。ところがその結果第一税關の總收入が殆んど明らかにされず。ごまかされ着服さるゝばかりであつた。のみならず、其の弊害は益々大なるものがある。と云ふことで

中國人と外人との併用と云ふことになつたのである。支那人のみであるとしても税關の收入に對し外人のなす如く或る定まつた當てになる系數を示して呉れないのである。それ故税關は矢張り外人をやめさせるわけにはいかぬと云ふ事になつて、今日は大いに好成績を擧ぐるに至つたのである。ところが又例の國民自覺の聲が八釜しくどうやら又外人は影が薄くなつて來た。そして右に述べた如き裏面の餘弊は到底、之を一掃する事は出来ない事情にあると云はれてゐる。

支那に於ける密輸入方面の珍談に就いては主としてその餘弊の今日容易に根絶する能はざる點の話であるがそれにはいくらでも談柄とすべきものがある。と云ふのは阿片にしる、武器にしる何れの品物にしても上海方面で吾人の耳にせることを綜合して見るに次のやうなことがある。

上海港内にては港務部その他の探索が嚴格である爲め容易に密輸入の方はやられないとのことであるがそれにしてスマツグルの専門家は細かい方法でいくらでもその網を潜つてゐるのである。そこにはいくらでも又抜け道が出來てゐるらしい。又大きい處は大きい處で相應のうまい方策も出來てゐるらしい。ところがその場所が場所であるから單に上海の港内ばかりがその中心となつてゐ

るのではなくウーソン吳淞の港外幾哩のそと即ち公海に屬するところまで出て行つて何等さし障りのないと云ふ處まで行つてそこで大手を振つてやつてゐるとの事である。

又寧波の沖合舟山列島の島蔭あたりに出かるとこゝに亦いくらでもそれに適當な地點があると云ふことである。そこで大規模のものとなる船全體が阿片彈藥の如き禁制品であつて大取引を活躍にやり遂げ又官邊との理解が出来てゐて中には兵力を以つて護らせておいてやるものもある。さうなればいかなることでも出来るのである。印度なりアラビヤなり遠隔の地より來たる巨船には往來する使命を帯びたるものもあつて途中某所より來たとき海上無電を以つて受授さるべき場所を打合せておくものらしい。そこまで手配をやるならば譯なく實行の出来る問題である。その邊のやり方にかけては蛇の道はへびが知ると云つたやうに専門家はよく探知し又よく調らべてゐるのである。一體妙な話であるがその小さい物にのみ目の暮れてゐるものは常に檢舉され罰せられてばかりゐるが大きい處を公々然やつてゐるやうなものは却つて網にかゝることも殆んどなく無事にやり遂げてゐるのである。かやうな不自然のことがいくらでも支那には見出されるのである。支那の犯

罪とか何とか云つたものもそのやり方次第では却つて國に都合のよい結果をもたらすこともあるわけであるから密輸入を八釜しく云ふやうなことなども實はよい加減なものであると云ふことを考へしむる事實がいくらでもあるのである。

六十三 支那棺桶祕話

支那の田舎の街外れに流れてゐる運河の沿岸を散歩し又は城内の會館あたりに遊びに行つて見ると大きな棺桶の並べてあるのを見ることがある。江岸に見る棺桶は雨晒しにならない爲めに菰を被せたり、或は粗末な瓦の屋根などを拵へてあつたりするが會館に預けてある棺桶は綺麗な人物山水等の繪の描かれた物も見當る。物が物だけに至極丁寧に保存されてゐるのである。これらの棺桶はこゝに置き放つしにされてゐる譯ではなく、それ／＼よい便を待つて郷里へ運ばるべき物である。家庭にあつても除七の忌明けを済ませた後丁寧なうちになると一年から永いになると二年も三年も之をうちに安置してゐるものがある。支那では親の遺骸は葬式を行ふ前成る可く永く安置して置

くほどが孝道に適ふとされてゐるのである。最近上海の市中で起つたことであるが或る葬式が北四
川路から踏切を越えて洞済路に向け通つてゐたのである。棺桶を乗せた自動車のもとに會葬者たち
の自動車が續いて走つてゐたのである。葬式は墓地へ行く途中であつたのであつて、棺は大康紡の
川崎某氏の愛兒の遺骸を乗せてゐたと云ふことである。丁度その踏切を渡つた頃であつた。突然銃
劍を持つた開北守備兵三名と、銃劍を持たないみすぼらしい乞食兵が十名あまりやつて来て、いき
なり靈柩車を止めと制するのである。そして兵隊どもその銃劍のまゝ自動車につかつか遣入り込ん
で来て失禮にもその棺の周圍やら、又會葬の乗物の内部から腰掛の下あたりまで隈なく之を調べ遂
には遺骸の納めてある棺の蓋まで開けようとするのである。いかに時局の際とは云へあまりに踏み
付けた仕打であるので、會葬者は少なからず驚き、百方説明に努めて見た。けれども情けないこと
に、言葉がよく通じない。危うくその遺骸に對しても侮辱を加へんとする刹那會葬者の一人が機轉
を利かして取りあへず兵隊にその位牌を捧げて見せた。そして明かにその棺桶の内容が外のもので
なく死骸に間違ひのないことを承知させた。そこで無智な兵隊共もやつとこのこと了解をしたと見え

てどうやら事なきを得たのであるが、その爲めに約三十分間も行列は立ち往生をせざるを得なかつ
たのである。その後之が問題となつて日本の海軍司令部からは支那側へ警告を發した。すると支那側
でも悪るかつたと思つたものと見えてあちらから謝罪の使を寄越して来るやら一時は騒ぎであつた。
支那兵が道路で斯様に人の棺桶を押へると云ふやうなことをするは、一體何を意味するのである
か。支那では棺桶が家庭にあらうと、會館にあらうと又江岸にあらうと、絶對に之が蓋を開けて内
容を調べたりすると云ふことはしないのである。然るに近年姦商どもが悪習慣に慣れ武器や阿片を
棺桶に入れ、靈柩の開かれないのを幸ひに之に物を入れ白晝之を密送する者が多いのである。それ
が爲め守備兵から若しやと云ふ疑を掛けられ道に擁して嚴しく改められるやうなわけなのである。
かう云つた騒ぎは如何にも支那でなくては見られない光景であるが、斯様にして棺桶を利用する所
の犯罪が或る隠れた方面に頻々行はれてゐると云ふはよく又考へたものである。こゝに支那民衆の
犯罪心理が那邊に活いてゐるかを見るのはかうした實例が續出するので存外興味深く感ぜらるゝの
である。

六十四 巨頭亡命秘話

孫文が日本、アメリカと世界の各地を亡命して廻つてゐた時の話は、大分古くかびの生えた話となつた。その後清朝の遺臣羅振玉翁が京都の吉田山に亡命してゐた話や或は又近く齊燮元、盧永祥が別府に亡命して来た時の話此れなどは誰しも好く知つてゐる話である。最近蔣介石が長崎雲仙から宋美齡との結婚のことで有馬の温泉に立寄り東京までやつて来たのはこれは亡命に非ずして單なる遊歴であつたのである。其の他支那の巨頭連中の日本に亡命して来たものは古くから考へて見ると色々あるのであるが、その必ずしも日本まで態々渡来しなくとも、近い處で天津、大連、香港といくらでも難を避けて、その安全地帯に隠れ安らかに餘生を送るなり又一時的にもせよ避難するものがある。これも亦亡命の一種と見られるのである。

ところがかの吳佩孚は奉直戦争で破れて、海路山東角を廻り、南揚子江を廻りて湖南岳州に身を落ち付けたのである。さすがは吳佩孚である。吳佩孚は途中人のやるやうな上海の租界に亡命する

ことをしなかつた。多くは先づ日本に亡命する。殊に巨頭連は別府に逃げて來るとか神戸に來るとか相場が決つてゐる。所が吳佩孚は決して外人のところ亡命することとはやらなかつた。さて巨頭連の亡命して日本に來るその逃げ方にはかなり亡命客の苦心とするところもあるのである。今其の方法の概要を探知したまゝ述べると大略左の如き手段をとつてゐるのである。

亡命客にしてその力盡き身邊に手兵をだに失つた巨頭連は先づ亡命するにどうするかと云ふと、身の安全を計る爲め或は再起を計る爲め大抵のものは外國へ渡らうとするのであるが、それには豫め變名をして外國の汽船に申込むのである。多くは出帆の前夜成る可く人目を避けてひそかに一二の秘書を伴ひ乗り組むのである。その時乗船場棧橋構内の電話と云ふ電話はすべて之を外づして置くのである。秘書の方でも同じやうに何とか名を書き代へ同室に、立籠るのである。そしてその出帆間際まではその部屋から顔を出さないのである。出來る時はそとに目立たぬやう見張りを付けて置くこともある。船の方では別人に變名して申込まれてあるから始めのうちは教へられなければ氣づかないのである。それが果して巨頭であるか否か知らないうちに船が着く、客はそのまゝ上陸し

てしまふと云ふやうなことになるのである。

亡命先生はたとひその船が出帆して外洋に出ても成る可くは室外に出ないやうにしてゐる爲め従つて人目にふれる機会も少なく、先づ監禁同様の形で満足してゐるわけである。しかし若し機敏な新聞記者でもゐてそれとなく之を探知し、部屋のボーイに代つて背廣を脱しボーイ服に代へ支那語を以つて之が接待に従事しドアを叩いて殷勤室内に入ると云ふ風にでもしてゐれば元來が記者だけに色々判ることもあるであらう。併かし多くは唯その噂がばつと擴がるのみであつてその時は既に船は長崎近く進んでゐると云ふ場合が多いのである。實にうまくやるものである。そして亡命客の巨頭連はその目的地たる別府の温泉に大抵這入るが亡命客中でも色々することがありその犬猿も管ならぬ齊燮元と盧永祥の如きはもと仲がよくなかつたので同じ宿に泊することさへ避けてゐた以前齊の泊つた宿なら御免を蒙ると云ふ。そこで盧翁は別に宿を取ると云つた風であつた。巨頭の亡命客に對して日本の新聞記者はあまりにうるさく又餘りに忠實であり付き纏ひ過ぎる傾きがあるやうに思はれる。

最近蔣介石が長崎雲仙に遊びに來た際の如きも始め二週間位と云ふことであつたが始んど常に記者から攻められ身體の自由まで束縛され足一つ延び延びと延ばさうと云ふ氣分にさへもさせなかつたのである。包圍攻撃もよい加減にしておかなくては嘘である。記者連中は亡命客に對する禮を失し殆んど之を極度までに利用しようとするのみを知つてそして遠來の客の意中を察してやると云ふことが毛頭ないのは大いに反省しなくてはならないところである。亡命客が歸國の後は齊燮元の如くもとの通り、矢張り軍籍に身を置き活動を續けて見たいと云ふものもあるが又中には盧永祥の如く身を銀行界に入れて實業家の仲間となり最早戰爭に關係することは飽いたと云つてさつぱり足を洗ひ天津の租界に納まつてゐるやうなものもあるのである。

尙清朝の遺臣羅振玉の如きは夙に京都の假寓を引上げてからは支那に歸り今は天津に在つて讀書に耽つてゐるのである。支那では斯うした軍人學者政治家などがその事志と違ひ、若しも世が世であつたらなどこぼしながら當人はすぐ名を亡命に假りて息抜きを海外漫遊を試みたり又暫く日本に落ち延びて捲土重來の計を考へたりしてそのうち機を見て支那に歸ると云ふが普通の様である。實

際眞の亡命と云つて外國で一生を終るものはなく、御都合次第の一次的息抜きと云ふが多い。全くあたまの轉換を兼ねたやうな呑ん氣なことに考へられるのである。孫文の如くそのどこ迄も主義の爲め民族の爲め一生を捧ぐると云つた類のものは極めて稀なのである。

六十五 脱税鹽船の大輸送

鹽務の収入は支那の借款關係では、非常に重大なる項目となつてゐるし又政府の財政にとつて重要な収入の一つとなつてゐる。又全國各省に亘る鹽稅事務は素晴らしい大きな仕事となつてゐるのである。浙江の省だけに就いて考へて見ても、毎年約二千萬元を下らない収入があると云はれてゐるのである。ところが事實はその半分の収入も難かしい事情があるのである。餘姚の鹽田を始め浙江省内の各地の鹽の取れる海岸は甚だ澤山あり従つて毎年それ等の製鹽地方から積み出される所の鹽船の數も亦素晴らしいものである。

そこで官邊では要所々々に見張りの兵隊を配置し専ら鹽船の脱税を防がんことに腐心してゐるの

であるが實際の事實をその土地に行つて調べて見ると、満載された鹽船の群が毎日非常な列を作り北航するのである。するとその見張り専門の兵隊は例によつて然るべくやつてゐるのである。例へば今三十隻の鹽船しやつて来るのを見届ける時は態とその中の二十八隻は見つて見ぬ振りをして之を見逃すのである。そして實際一二隻の脱税船文を態々発見したやうな態度をして之を取り押へるのである。全くの芝居ではあるがやうにして看過してやつた船から見逃し賃がとれるのである。江南地方の鹽船は悉く長江下流イチン儀徴の港に集るのである。その儀徴に蝟集する鹽船の光景と云つたら帆檣林立實に天下の偉觀である。さてその浙江の鹽船は浙江省で税を納めるべきであるが之を態と大部分免税同様の取扱ひにしてやるのである。官邊に對して表面それで通つて行くのである。勿論見張りの兵隊はその脱税を知らないどころではないが例の見つて見ぬ振をしてゐる關係から少からぬ分け前に預ることが出来るのである。本來見張りの兵隊共は給料が此の地方で月六元と定められてゐる。六元ではその家族の生活を支へることは到底出来ない故、どうしてもその分配に預りそこに幾分のゆとりを得なければならぬ譯である。そしてその職責としての脱税船取押への仕事

はともかくその最後の一隻を押へたと云ふ事實で名目は立つてゐるのである。

此の要領の好いやり方は省政府のところにも又司令の所にもちやんと分つてゐるのである。それ故司令のところへ持つて行つて又その御大の之をよく看過してゐて呉れたと云ふ報酬に莫大な額を勘定して納めるのであると云ふことである。斯様にして二千萬からあるべき筈の鹽稅も大半、上から下まですべてが公平に分配して了ふのであるから表面は僅かなものになるのである。表面のももそれが中央政府に達しないうちに途中で大分消えてゐる譯である。されば元來鹽務の方の本當の實収入と云ふものは殆んどだらしがなくて地方の役人や兵隊共のよい食ひ物となつてゐる觀があるのである。こゝには唯大體の支那式のビジネスがかくの如きものであると云ふことを記すに止めておくのである。外人の鹽務官吏はすべてかうした裏面の消息をも承知して文明式に而かも八釜しく云はずその取り立て方をやらなくてはならぬのであるから随分骨の折れることであらうと察する勿論鹽務稽核所の所長には多く支那側の役人を一人外人と併立分掌せしめてゐる。これはメンツ面子の爲めにもよい事であるが餘りテキパキ仕事をやり過ぎると下のものの受けが香ばしくなくなる

爲め飾りに入れてあるやうなものである。そこらあたりはどこ迄も支那式に大陸的に出來てゐなくてはならぬとは内部のものから直接聞かされた實話なのである。

六十六 上海秘密結社

共産黨がその策源地として最も深刻な計畫とその實行振りを見せようと努力してゐる處は上海であらう。上海には又K、K、Kの結社であるとか勞農ロシアの秘密結社であるとか、又朝鮮の假政府であるとかその他世界四十餘ヶ國の國民の集まつてゐる所であるからその間、海山千年と云つた手合のこゝに自ら落合ひ其の間又筆紙に盡し得ざる結社の本部を此の天地に忍ばせてゐるものもあるのである。

秘密結社のある處は租界の目抜き通りよりは、むしろ裏通りの路次から通り抜けになつたやゝこしいところでその二階とか三階とかに事務所をおいてゐる。さればその位置が第一容易に探し得ない所に設けられてあるのである。その上その結社の組織もなるべく分り難く作り殊に秘密を洩

らすものは直ぐ銃殺さるとの制裁が設けられてゐるのである。又其の言語の點、合圖の笛の吹きかた、又結社に出入する人々の風貌など、一つとして結社その物の性質と調和してゐないものはないのである。その結社に策動せるロシア人の如き隨分その込み入つた或る路次の奥の樓上に入出入してゐるのを見たことがある。

上海の工務局が豫算の大部分を傾けて、警察事務詳しくはクリミナルとポリテイカルの兩方面に分けて年中糾察探偵のことに努めてゐるのであるが、結社側の巧みな大車輪的活動は、かうした表面的の網目に引掛かることは殆んどないのである。殊に上海は有産階級、資本家が中心となつてゐる大都會であるだけに、暗殺團其の他の危険分子の活躍が少くなく殊に近年は資本家と工人側の争議、或は屬領地と本國との軋轢から生ずる重大事件等が、常に醸されてゐるのである。

時々租界のボーイが家庭で口ずさんでゐる言葉を注意して聞いて見ると、次の様なことを云つてゐるのである。甲のボーイはうちの裏口の戸板が隙いてゐるのに気がつき釘で打ち付けて直して置かうと可愛い心持を現はし云ふと、乙のボーイの云ふことは、頗る不穩な色を帯び變である。曰く

どうせ近いうちに此の附近は焼拂つて了ふことになつてゐるのだよ。餘計なことなどしないで放つて置いた方がよいよ。云々、之を聞いた家の細君は身の毛も慄つ様な氣持がして主人の會社から歸るのを待ち聲を秘めてその次第を話したとのことである。かうしたボーイが結社に係のあるか無いかは別問題として、ボーイ風情の頭にまでもかゝる不穩份子の考が侵入して居る。ボーイ達の心にも一種の殺氣を帯びて來ると云つた風の空氣が認められるのである。これは上海の險惡なる近頃の實情を物語つてゐる一例である。

或は某暗殺團から派遣された某決死隊が、眼抜きの上で心當たりの人物を要撃し、疾走せる自動車の前に突立ち大の字になつて之を阻止し、ピストルを手にして中に入り車中の要人を慘殺したなど、その間髪を入れぬ間の仕事を電光石火の如くに行つたのである。斯う云つた秘密的慘事の裏面に之が糸を引いてゐる結社は、如何なる程度迄今後進むか少しも分らない。朝鮮假政府の連中の如き、本國平安南北道方面よりその財源が來ると傳へられてゐるがその兵糧も何時しか絶えてしまつて、此の頃は何れの國から取つてゐるか、消息を明かにしないのである。祖國を懷ふ爲めとは

云へ大勢に逆行してゐる者は事志とたがひ資源に窮し昨今行くところとして家主から追はれ追はれて、遂に集まるべき巢さへなく甚だ惨めな状態にあるとのことである。而かも尙時折時ならぬ火花を散らしてゐるのである。中には朝鮮より上海に來り、生活の爲めに假政府の教科書編纂事業の主任の職を勤めてゐたが、その月給を拂つてくれないのを理由に遂に假政府を裏切つて東京に舞ひ戻つたなど云ふ様な青年に會つたこともある。

要するに上海に見る大抵の秘密結社と云ふものは先づ生活問題に基礎を置いてゐる者が多く、それ／＼某方面から兵糧を買がせ、その兵糧の續く間だけ陰謀團に加入してゐると云ふのが普通の様である。併し中には主義主張の爲めの最初の決心を少しも弛めずどこ迄も公憤義憤の爲めにやつてゐるものもあるやうである。或は單に一時盲ら滅法の行動に出てゐる手合もあるやうであるし又中には社會科學の見地から堂々たる理想の下に、現代社會の破壊を叫んで止まない者もある様である。上海當局は如何に網の目を細かく張つたところでもかうした色々の結社の策源地に畫策する人々の眼先を柔らめるわけにはいかぬ。時折眞の夜中の靜かな街上に俄然銃聲數發、機關銃の軋り走

る場面を演じたりなど可なり上海客中の夢を破られることもあるのである。

こゝには上海の街路に潛む秘密結社の具體的記述に就いては自ら別にその人もあり、又逐一明記すべき性質のものにも非ざれば立ち入つたことはすべてこゝに省略しておきたいのである。

六十七 革命は大罪を構成せず

支那では君、君たらざれば臣、臣たらすと云へる語があるやうに支那の民衆のあたまには一國の主權は民權主義で行けるものだ云つた感じがあつてよほどデモクラティックなところが昔しからあるのである。それ故匹夫の紂を弑することは敢へて大罪にはならないのだと云ふ考があつたり、君が君らしくしてゐる間は天子としての君の價値はあるのであるがその君が匹夫と變らない價値に成り下つた時には、最早や自分達と同様のものであると云ふ頭ごなしの考を有してゐる。蓋しこは恐らくは大多數の支那民衆の考であつて今日の民族、民權、民生の三民主義が評判を取つて來たのもその邊の急所を突いてゐる所に強味があるものと云へるのである。

革命の事業はこれ等君主を君主と思はず、君、君たらずんば臣、臣たらずで行つて差支ないとなしてゐるのである。従つて革命の眼目は人心既に君を去り、民心が之に厭いて來たと云ふことを物語る一大變革の場面である。と見てゐるのである。されば大衆本位の見方からすれば民権を主張する所の革命その物は健全なる民族の偉業であるとして見てゐるのである。大衆の幸福人民全體の安寧利益を増進せんが爲めには、民心を離れた君から脱却するに在りとなしてゐる。されば革命は健全なる大衆のとるべき必須の道であつて又民衆社會に與られた天の命であると解せられてゐるのである。

されば若しも世が亂世となつて天下の大衆が安堵の思ひも出來ず唯苛斂誅求を事とするやうな惡政は之を建て直して、に民族民權民生の三民主義の下に新たな善政を開くことに身を以て當たる者が出來なければならぬ。之は逆賊どころか天下の救ひ主として仰がれるべきものである。民意の副はない政治は革命に依つて之を叩き潰し滅亡に歸せしめそして民意にびつたり合した政治のやり方を作り出すと云ふことが大衆の最も重大視すべき永遠の要諦であると、斯様に見てゐるのである。然るを従來の孔孟の教などでは君臣の義に重きを置き、臣は君の位を犯さない様に、又君は臣下に

位を奪はれないやうにと云ふことを根本觀念となし儒教の思想からのみ八釜しい倫理道德を力説してゐるのである。けれども従來の君臣の義を中心となせる所謂王朝の生命は人民大衆から厭かれて來た時には俄然盡きて了ふものである。期間は大概二百年から三百年位を限度としてゐる民主本位の民権は然らば絶對のものかと云ふとこれ亦然らず要は大勢とその人に在るのである。

近東湖南湖北方面の大衆の間では、中華民國は今度の革命軍に依つて統一が出來るであらうが、それには革命の聲を擧げてから二十一年掛かなければ中國は一統されないと云つてゐる。これはどこからそんな年數を割り出して來たのかと聞いて見ると革命の革の字を分解し來たつて、革の字の上部廿と一と中と最後の一字のこの四要素を取り出して、之を都合よく讀むに二十一年にて中國一統と云つた工合に呼びなし、さも尤もらしく聞へる説にして唱へ出したものである。

固より孫文の唱へた革命の大業は、今日未だ成らず唯漸くのこと革命軍が遠く廣東から北京まで風靡して大體之を形式上乗り取つた恰好になつたと云ふに過ぎないのである。革命そのものは尙幾多の暗膽たるものが各方面に横たわつてゐる。殊に蔣介石、馮玉祥、閻錫山の融合の如何政治の組

織その他萬般のことが殆んど緒についてゐない。否内部の統一のむつかしく、其の間利益と地盤を得んことにのみ巨頭連が焦慮してゐる有様は、さながら今日の支那四百餘州の舞臺を彼れ等策士連中が取引を營む一大市場となせる如き觀があるのである。

何れにしても既に從來の軍閥はその餘りに激しい餘弊を深刻に大衆に與へたものであるから全然今日では民心を離れ、大衆から飽かれて了つた。今では全く新しく陣客を立て直し、世界の趨勢に順應し支那民族として國家として又人民として面子と實際問題の兩方から之を改革して行くと云ふものでなくては大衆が承知せぬ。こゝが前にも云ふ如く天の命であるとの信念の下に大衆がその幸福増進と民族の自主權とを叫ぶやうになりこゝに大勢はもはや一君主の面目とか一王朝の立場なんか拘泥しなくなつたのである。これ迄の如き混沌状態から革命を起すは決して大罪を構成するどころかむしろ救國の大業を興したとの觀があるのであると見てゐるのである。

十 文字上に見る支那太古の
處刑風俗

六十八 辟の字に見る罪人

辟

辟字は昔しから君主の意味に解せられ、古代の一國の王と見られ又其の君主の名に依つて行はれた法律の意味をも現はしてゐる。それ故辟は君とも解せられ、又法なりとも解されてゐる。

辟の字の起源は、もと三つの要素から成立つてゐる。いま上古祭祀に用ひられた器物古銅器類に現はれた所の銘なる象形文字の方から之を察するには、明かに刑罰に因んだ要素が主になつて組立てられたものであることが判る。其の刑罰中でもこれは殊に重罪に處せられんとするところの場面を示したもので、□の字を以て其の刑の宣告を云ひ現はしてゐるのである。それ故此の文字の構造は、一方に司法刑罰の權威を示せる意味にもなり、又其の法を實行する君主の意味にもなる譯である。上古の君主は司法刑罰に依つて其の威嚴を保ち、民は其の處刑の實權を握れるところから、君

主の存在が認められ又君を恐れてゐる気持ちも出てゐたものと解釋されるのである。
 支那記事によく見らるゝ例の復辟の辟の字の用法に就いても、その根本的の意義は君を復すと云ふことでは右に述べた説明から、推知することが出来るのである。後世辟の字を用ひた合體文字は頗る多く、僻の字、癖の字、壁の字、璧の字、臂の字、霹の字、鬪の字などあるが何れもこは皆その音符を示したものに過ぎぬのであつて刑罰には無關係なのである。

六十九 辛の字に見る處刑臺



辛は古來から鼻とも書かれ、本來鼻を切りとらるゝ刑罰を云つてゐたのである。
 しかし辛の字其のものゝ起源は處刑の道具を指せるものであつて丈の高し一種の處刑臺に象れる物である。上邊は平かで、周圍にはとげ／＼しき青龍刀の如き鋭い物が付いてゐるのである。

辛の字は又時に裁判、訴訟の意味にも解せられてゐる。こはもと言の字を中央にその左右へ持つ

て行つて辛を二字並べてゐる文字即ち辯舌の辯の字で見るとよく判るのであるが此の辯の字は原告被告兩方の罪狀を其の訴に依つて聞き、其の言に對して何れを罪にし、何れを無罪となすかの判決が、一つに掛かつて此の訴訟を取裁く判官の手にあることを示したものである。それ故辯の字に含まれた所の言は、又判決の意味をも示してゐるのである。
 要するに辛と辯とは密接な關係を有するものであつて、他の辛辣の辣の字にしてもその字面の中に辛と云へる刑具を有するが故に、深刻な意味の之に宿つてゐることが認められるのである。其の他すべて辛の字の含まつてゐる文字を見ると何れも之に凄味の聯想せらるゝ意味のあるのは、此の字の起源をたねに考を廻らせば自ら明かになるのである。

七十 囚の字に見る首枷



後世捕虜のことは之を囚と云ふ。又牢屋に繋がれて居る罪人も囚と云つてゐるが、本來の囚の字の構造はさうでない。囚は一見して箱の中に幽閉された人を

示した形に見えてゐるけれども、それは事實ではない。古代の祭祀に備へられた古銅器銘に見える囚の字からするときは方形の箱の中に人の書かれてゐるやうなのが普通の字體となつてゐるけれども、更にもつと古い時代に遡つて、少なくとも殷の時代とか或はそれ以前の文字の構造から考へて來ると次の様な製作から始まつてゐることが推測せられるのである。

本來は四本柱の格子造りで四方同じ様な體裁に組立てられ、その床板の部分には厚板が二枚張られてゐる。そして其の中央のところは首が挟まれるやうに丸くえぐられてゐる。さうしてその二枚の板は自由に開かれたり又合はされたりすることの出来る様な仕掛けになつてゐる。若し其のえぐられた部分へ犯人を連れて來て、首を其の板に挟まらせる時は、その宙に引懸かつてゐる頸で以つて全身の重味を支へらるゝやうになつてゐるのである。手足は無論地面から高く宙にぶら下つてゐるのである。

此の刑罰の方法は古代文字の構造に最もよく表示され、上古刑罰の中酷刑の一つと思惟されるのである。それ故古代文字の形はその中に這入つてゐる人のあたまが、柵の上邊の一邊から突き破つ

て輪廓外に出てゐるのを見るのが本當の形である。今日廣東を始め南支那に於てこの種の由緒深き刑罰が各處に行はれてゐるのは、古代の慣習を傳統的に傳へてゐる處刑法と云へるのである。

七十一 皿の字に見る罪人慰藉



溫泉、溫和などの熟字を作つてゐる溫の字のつくりはもと囚と皿の二字から成つてゐる。世間で之を日と皿に書くのは後世誤られた俗字であつて、二千年以上の古代に遡れば、必ずこは日に非ずして囚が書かれてゐる。囚の字の本來の構造は前に述べた通り、その最も苦しい刑罰の方法を象形文字として現はしてゐるのである。されば、之が皿と取り合はされて出來てゐる文字は、其の如何なる意味を生ずるかは略々想像し得られるであらう。

皿はもと背の高き高付様の食器であつて、今日でも支那では神前、佛前に之を備へるときは普通高付を用ひてゐる。古代孔子時代に祭器として、簋、簠、籩、豆として知られたる豆は、正に之を指したものであつて、大略皿の如き形をなせる器物である。時には之に食物を盛りたる意味を現はせ

るか、内部に盛られた品物を示せるしに點を打たれたものもある。されば此の文字は實に處刑場に刑を受けてゐる罪人の口元へ持つて行つて食物を盛られた皿を與へる光景を現はしたものと解されるのである。従つてこの溫の字などに溫ぐとか、溫かみとか、云つた意味の出て來るのも、此の文字の構造が既に之を裏書きしてゐるによるのである。所謂溫情味に満ちた氣分が、此の囚と皿の合體文字に依つて描き出されてゐるのである。

七十二 縣の字に見る重罪犯人



縣はもと懸かるの義から出來てゐる文字である。今は縣に心を加へなければ其のものとの意味が現はされなくなつて來た。縣の一字だけでは行政區域の縣の意味を現すに過ぎずして何の爲めに此の文字の要素が配合されてゐるか全然忘れられてゐるのであるが、之も今より三千年前以上古に遡つた象形文字を見るとよくわかるのである。全く繪の如く書かれてゐるのである。

本來の縣の字の要素をしらべて見るとは糸と、首の倒形の外に丈の高い木の字が配せられてゐる。つまり木系首の倒形の此の三要素から成立つてゐるのである。抑もこの三要素はそれ／＼何を意味するものであるか。孟子や、莊子の文面を見ると「倒懸を解くが如し」と云ふ言葉があつたり、帝の懸解などと云へる言葉が見出される。が、上古刑罰の方法として其の犯人を懲らしめる上に最も苦しい重刑は人間の身體を倒まにして足を括り、之を樹上の高い枝に結び付け、其の儘ぶらつと吊るすことである。そして成る可く衆人環視の前に此の逆様にした酷刑を見せつけると云ふことが、如何に一層有効であるかが察せられるのである。

古代では縣の字は木の字が根本となつてゐて、之は繩又は綱を結び付けた繪が書かれ、其の繩の末端に首が倒かさまに描かれてゐるのである。それ故縣の字の扁に見るところのものは、明かに首の倒形を描寫したものであることが分る。こは首の古形「首」を轉倒して考へれば直ちに其の傳來を察することが出来るのである。

古代支那社會の習慣と約束に依れば、符牒的に首の字さへ書けば人間のからだ全體を代表したも

のとなる。例へば道路の道の字を見ても分る、これは定と百との二要素の文字であるが通行してゐる行人の姿を取り合せる爲めに單に首のみを持つて來たのである。又古代文字の中にはそこへ人の字を挿入して來たものもある。人と行の字を組合せて道の字を作つてゐるのがそれである。して見れば縣の字の古形に現はされる首の倒形は、犯人の身體全體を書き現はす代りに、其のシンボルとして首のみを倒さまに書き、其の頭髮の垂れてゐる所までをも細かく描いてゐる譯である。

之に依つて考へて見れば古代最も殘忍酷薄なる刑罰が、樹木の枝に縛られた罪人の光景に依つて象徴されてゐるのであつて、こゝに刑の實行者又其の家族その他のものなどが集りその生活に必要な日用品を賣る店も出来る。そして次第に其の處刑場を中心として、住民も群り集つて來るのである。つまりところその處刑場が小都會をなす本になつて、之が次第に懸城の起源をなすに至つたものと見られるのである。かくして支那都市の淵源が頗る他の國のそれとは發達の歴史を異にしてゐることがわかるのである。

七十三 獄の字に見る宣告振り



支那上古の習慣を見るに多くの場合に犬が現はれてゐて來てゐる。數多の食器の並立せる所へ、犬が割り込んで來た所を字に現して「器」の字が出來たり神前に供へられた祭器に犬の肉を盛つて、之を恭しく奉獻する場合を示した文字に獄と云ふ字が出來てゐたり供へ物の状態其の儘文字の構造上に現はされてゐるのである。後世では品物の種類の如何んを問はず、獻上物はすべて此の獄の字で代表されてゐるわけであるが、本來は狗肉を奉る場合に限られてゐたのであつたらしい。ところが又支那の牢屋には古代數多の犬が飼養されて居つたものと見えて、群犬の互にいがみ合ひ。争ふ場面が頻々あつたらしい。其の時牢屋の役人が出て行つて之を取り鎮めるのである。そこで其の牢屋其の物を現す場合に、左右兩犬と其の役人の裁く時の言葉とを取り合はせて、獄の字が作り出されてゐるのである。それ故今日の監獄の獄は犬と裁判官との取合せ文字であつて、古代の司法處刑の古習を示した所の有力な文字となつてゐる

のである。

又牢屋の牢の字であるがこは小屋の中に繋がれたる牛を意味するのであつて古代の牛の生活状態を現してゐる。牢はもと古代は牛が三頭書かれてゐる。三頭は複数の義を示すに過ぎないのであつて、畢り牢は牛小屋の概念を現してゐるものと解される。時には羊の數多並べられてゐることもあり。又豚のたくさん書かれてあることもある。豚は一頭の場合もあり、三頭の場合もある。今日人家の家字がもと豚小屋の義なりとは想像されてゐないであらうが、今でも支那の田舎に行けば人間は豚小屋の一部に同居して生活をしてゐるものがある位であるから、家の字の出來た頃の時代にも人間と豚が同居してゐたであらうと云ふことが、此の家字から間違なく想像されるのである。かやうに見て來ると家にしても、に牢しても、獄にしても、共に人間が豚、羊、犬などの家畜と殆んど同様の生活をなしてゐたことが赤裸々に裏書されて來るのである。

七十四 善の字に見る神羊



何れの民族の考を以つてしても人間の知識判断など云ふものは神の前に出れば其の權威は薄弱なものであるからその難問題にぶつかりその善惡を定め之が判決を與へてもらふと云つたやうな場合になれば人間の裁判なんかに従ふ氣になれず信頼するにも足りないと思つた考が起つて來る。これが根本の考となり人間以上の何者かにすがりその判断にたよらうとするに至るのである。

古代支那に於ては斯かる場合には、神前に於て神羊を用ひたのがたしかにその一つの方法であつた。羊は其の風貌と云ひ、其の性質と云ひ、又その態度と云ひ、すべて人間よりも一段高級にして何となく神意が之に宿つてゐるかの如く見えるのである。それ故古代では支那人の神羊を信ずる心は非常に厚かつたものである。

曾つて齊の國の王が二人の兄弟の裁判沙汰を取り裁くに當たり親ら其の方法に窮し、その二人を連れて神前に至つたと云ふことである。そして神羊を連れ出し、先づ甲の罪狀を讀み上げた。羊は温順しくしてゐて之を認容してゐる如く何事もしなかつた。ところが乙の方の罪狀を讀み上げるに

至つて神羊は忽ち躍り來たつていきなり乙に喰ひ付き廟を廻ること數回にして倒れた。此處に於て裁判は決つた。そして甲は無罪にして乙は有罪であると云ふ判決が與へられたのである。此の挿話は墨子の明鬼編に見えてゐる有名な話の筋書であるが、之に依つて見ても古代に如何に羊が、善惡の判断を下す場合に欠く可らざる神判を行つてゐたかが伺はれるのである。

されば羊は古から善のシンボルであつて、君子を友としてゐる靈獸であり、正理に合し、法にもとらざる判断を下して呉れる者と見られてゐるのである。其の考が字面に詳細に現はれ、羊を前に原告、被告の二人を連れて來る。さうして其の罪狀を讀み上げると云ふわけであるから文字の上にもそこで言の字が羊の左右に並べられてゐる。つまり羊と二つの言との三要素から成立つてゐるのがこの善の字の起りなのである。ところが其の字形の餘りに複雑であるが爲めに度々形が省略せられて複雑な経路を取り、終には今日に見る如き簡略な形に改良されたのである。

尙美の字、義の字、祥等にもそれ／＼羊の含まれてゐるのは、皆其の善美を表現する爲めの要素として、之が見出されるのである。詳細に云ふとこの善の字の古形の中に見出される二つの言にはも

と争ひ競ふ意味があつて、裁判が益々混亂に陥ることを意味してゐる。そこへ神羊が姿を現して來ることは、之に依つて一刀兩斷的に神託の天降つて來ることを示したわけであるから、古代人の考からすれば否應なしに之に従はざるを得ないのである。

右の如き裁判の仕方は、之を神の裁判又は神判と稱し、印度に於ては鰐魚を用ひ、沖繩に於ては蛇を用ひ、蒙古に於ては鷄骨を用ひ、其他中央アジアから支那内地に掛けては、種々な靈的動物を用ひて、これ等神判の方法となしてゐるのである。これは、歴史上にもよく知られてゐる事實である。幾千年の昔し支那の海岸地方で、龜を用ひ、山東の蔡と云へる地方では王侯が龜甲を用ひて占トの方法に依り、或は河南黄河の北岸安陽でも同じ方法に依り、狩獵、結婚、惡魔拂ひなどのことを之で卜つてゐたなど、何れも皆これ／＼に靈的動物のお告げを借り來たつて其の神判の命ずる所に従つてゐたと云ふ事實を物語つてゐるものと見らるゝのである。

七十五 罰刑の兩字に見る刑刀



支那の上代社會は古代に遡れば遡るほど體刑が盛に行はれ今日のそれ以上に複雑を極めてゐたらしく思はれる。輕罪は輕罪の様に、重罪は重罪の様に、それ／＼よく規定が出来てゐた。小罪と云へども懲らしめの爲めに相當刑刀が振り上げられ又其の罪はどなり罵られてゐたことがわかる。罰の字は正に其の状態を物語る構造を有し、もと罵詈の言に持つて行つて刀の配されてゐる文字である。即ち片手に刀を振り上げ口に罪を罵つてゐると云つた場面がこゝに表示されてゐるのである。いかにも上代らしい氣持ちが見られるのである。其の冠に見るものもと網の象形であつて、暴行犯人に網を蔽ひ被せその脱出を防いでゐたものかとも思はれる。

罰の字の方は、刎割の交りなどと云ふ語に用ひられてゐるので知られる通り、此の文字の眼目は首を切ると云ふ刀の部分に在るのである。斷頭臺上、首の無雜作に刎られる刑罰を意味した文字で

あつて、刎と同じ様な意義を見せてゐる。すべて刀の字を含む所の文字は後にリ刀となり利の字の旁に見る如くりの字に變形してゐるけれども、元來は多く、劍、則、割、初、前、などに見らるゝ如くすべて裁斷、切開等刀の意味に關係しないものは無いのである。此の中にも罰とか刎とかの如きは刑刀、青龍刀等を以て人の首を刎る意味を示すときに用ひられたものと察せられるのである。

七十六 盟の字に見る血器



古代支那の社會に於いて約束を固く守らせる習慣法に二つの場合が見出される。それは誓の字で現される場合と、盟の字で現される場合とがある。誓は其の文字の構造から見ると惡事を再び繰り返さないやうに誓はしむると云ふ意味であると思ふ。法律上から社會の制裁に基づいて、犯罪行為を再び繰り返さないとか、其の決心の程をかたく約束させる時に誓ふ場合とかに用ひられてゐる。之に反して盟の字の方に現はされてゐる意味は、單に自分個人だけの誓でなく、城下の盟とか、今日では國際聯盟とか云つた如く、廣い意

味の盟ひであつて同盟の意味などにも用ひられ、其の使命の重大味は一層深みを加へてゐるやうである。

今此の盟の字に就き詳しく其の起源に遡つて考へて見ると種々の趣味ある事柄が次の様な構造から明になつて來ることを知るのである。

上半の明の字はその盟と云へる言葉の音を示したもので、別段意味を示したのではない。下半の皿はもと血の字に書かれてゐて、例の高築様の足のある禮器の象形である。神前に供へる爲めの祭器である。古來支那では人間が神前で固い約束を取り交はすと云つた場合には莊嚴な氣分であつて牛、羊、豚等の犠牲を殺し、其の血を禮器に盛り神前に供へるのである。さうして例へば國家重大事に際し、或は城下の盟をなすとか或は豪族全體が祖廟の前で大會議を開き子々孫々の爲めに、或る種の盟をなすと云つたやうなシーリアスな場合に此の神前に供へられた血を銘々順廻りに恭しく啜り、神を證據人に立てて、天地に盟の言葉を捧げるのである。所謂神明に告げて盟約をなすとは之を指すのである。それ程までにするのであるから若し之に違ふ時は甘んじて罪を受くるの覺

悟があると云ふ深刻な決心が現はされるのである。

後世になると其の血器の前で、神明に盟ふ心持ちだけは同じであるが、その血を啜るやり方が簡略に改められ、單に指で以て唇に生血を塗り付け、之で儀式を済ませると云ふ風に變つて來てゐる。何れにしても尊き犠牲の血を神前で口にすると云ふことが、此の盟の字の本義となつてゐる。さればこの盟の字には元來血器の形が表現せられ、其の血器に血の盛つてある標がもと必ず現れてゐた。後世では變化してどうも聯盟、同盟などの語であつても、單にその義務としての負擔金を負ふとか、折角の同盟を結んでも御都合次第で之を解くなど、頗る薄弱なものとなり、權威が失はれて來た傾がある。けれども、周代或は周以前の盟ひ方と云ふものは正に上に述べた如く、頗る原始的であるがそれ丈に又深刻味を帯びてゐるのである。

七十七 劉の字に見る家業

中華民國の人々の姓を百家姓に照らして見ると色々の姓があり、よく之を味つて見ると自ら其の



古代の社會狀態も窺はれるのである。例へば林下に住んでゐた人は「林」の字を姓としてゐるとか、楊樹の下にゐた人は楊姓を名乗るとか又獄吏を勤めてゐた者は其の役柄が自ら姓となつたと云ふやうに種々興味のある事實が辿られる。恰度日本でも山下、田中、池上、等云へる姓がそれ／＼その譯で出来てゐたり、又服部（ハタオリベ機織部）とか、陶（スエ）などの如く、その職業上から來た姓のあるのと同じである。今日支那の姓によく見る劉と云ふは歴史上でも頗る著名な姓として知られてゐる。漢の高祖も、もと劉邦の名でひろく知られてゐることは云ふ迄もない。此の字は今文字學上から之を分解し、古代文化に照らして考へて見ると、之がりうと云へる發音を取つてゐる譯はその要素の中に卯を有するがためである。柳の「りう」留の「りう」聊の「レウ」等と同様である。卯の音には「ぼう」と「りう」が「レウ」の三音のあることは云ふ迄もなく、貿易の時の如きは「ぼう」の好例である。貿の時には音が變つてゐるが、劉、留などのやうにその「りう」となる場合の方が多のである。かく劉の字はその音符の卯がついてゐるので其の發音が出てゐる譯であるが然らば其の殘りの部

分は何を意味するわけであるかと云ふと、これは古書に依れば削るの義であるとする。刀を以て物を削ることを意味したものであつて、之は人肉を削らうが、何を切り崩さうが、すべて刀を取扱ふことを示してゐる文字であつて、後世の首切役専門の仕事の意味したものと云へる。されば劉と云へる姓はもと双物を取扱ふことを職業としてゐたと考へらるゝつまり慘忍性を聯想せしめる性であると解せられるのである。

元來象形文字では刀は青龍刀其他の刀子に共通なる双物の双の輪廓を其の儘現してゐるものであつて、その實物の形を示せる繪文字から出てゐるものであることは云ふを俟たないのである。以上こゝに述べ來つた十個の文字解剖は、要するに古代社會の殘酷味を表現せる方面のものゝうちから抄録して述べたに過ぎない。無論古代の刑罰殺傷、其他社會の暗黒面を物語れる文字は無數に發達してゐるのであるが、併し右に擧げた例だけから見ても之を以て全豹を推知することが出来るであらう。

文字の解剖は、長編の歴史物語を繕くよりも單刀直入に、其の字面に現はれてゐる要素により、

的確に其の古代文化の状態を明かにすることが出来るのである。されば若し之に向つて正當なる判斷解釋を試みることが出来る時には奥底の知れぬ奇矯なる古代文化の局面の縮圖が文字を通して、彷彿として現はれて来るのである。吾人は青龍刀に關聯した幾多の物凄い場面をこゝに社會事實から説き去り説き來たつたのであるけれども、要するにこれ等の事實は細大漏らさず、すべて斯うした象形文字の中に含蓄されてゐることがわかるのである。

世の文字學に興味を持たるゝ方は、斯う云つた文字解剖の方法に依つて、各般に亘つて支那古代文明がエチプトの繪文字、又アツシリア、バビロン文字の起源、又更に進んではスメル、アカツドの繪文字と共に世界の三大象形文字として、これ等太古の文明の比較研究に資することが出来、少からぬ興味を引き起すことが出来るのである。こゝには唯序でに其の研究の手掛りに數例を紹介するに止めておく。

十一 今 俗 異 聞

七十八 堂奥に入りたる泣き方

支那の時局を題目に青年留學生諸子と時々互に論議をしてゐる際にはまゝ頭腦の明晰なる青年とか感情に激し易い學生共の中には、泣いて祖國の肺甲斐なさを物語り果てはすゝり泣きして大いに其の情けない残念な立場にあることを訴へる者がある。或は又中には支那本國に在つて、大道に演説を試み國際問題を提げ來たり大衆を前に、わん／＼泣いて訴へる者もあるのである。固よりこれは自己催眠に掛かつた譯ではなく、又感情に走つて泣き出した譯でもなく、眞に萬感胸に迫り衷情止むべからざるものがあり、その至情からしておのづから涙となつて出て來るものと察せられる。併し青年の常として國を憂ひ、國家を思ふの念がかく迄切實なるものがあるに逆産者流の租界に月に酔ひ、美酒に耽溺して醉生夢死の生活にあてがれてゐるのとは餘りに懸け離れ過ぎた世相である。しかし事實青年の泣いて告げてゐる心持ちに對してはどこ迄も同情し買つてやらなければならぬことと思ふのである。

ところが、支那各地を歩いてゐるうちに自分は喪家の棺柩を守つて女どもの頻りと濕めつぽく泣き叫んでゐる場面を見るのであるがこれが又一種異様の感を催させる。或は又葬儀の鹵簿中に見る泣き女の光景の如きも意味深長のものであるやうに思ふ。かつて杭州城内は上馬市街の或る土豪の家を訪ねた時の光景に、夕方七時頃であつた。亡くなつた主人の棺桶の周囲には遺族の女共多勢身を屈し、棺に縋り土下坐して思ひ思ひの節を付けて盛に聲を張り立て、泣き悲んでゐるのである。中には涙に鼻汁までしたゝか出して見る目も哀れな姿を見せてゐる者もある。ところが三十分も経つと、そのうちの年増の一人の女が泣き止めたのを合圖に一座はパツタリ泣くのを止めてしまつたのである。丸で樂隊か何かのやうである。如何にも時間正しくきまりもよく突然あゝして悲しい聲をよくも制することが出来たものであるかなと、不思議に思はれてならなかつた。必ずしもこれは人の云ふやうな工合に芝居を演じてゐるのでもないらしかつた。

會つて臺灣淡水に於いて洪以南翁の第二夫人が亡くなられた時、自分は葬儀に參列し、殊に鹵簿中の泣き女に同情を寄せ且つ人一倍その光景に注意を拂つたのであつた。女どもは行列の紫綯を片

手に、一方の手で頻りと涙を拭うてゐる。頬を泣き赤めて眞に號叫しつゝ歩を運び何れ劣なぬ濕めつぽい哀趣を見せて居たのである。固よりその泣き方は何と云つて泣いてゐるのかよくは判らなかつたが確しかその中には頻りと夫人の生前のことなどを思ひ出して、愚痴つぽく物語つてゐる様な泣き方をしてゐる者もあつた。世人はやゝもすればかゝる機會には外から泣き女専門の連中を頼んで寄せ集め、列に加はらしむるのである云々と云ふ者もあるが、事實であるか否かよくは判らないのである。

日本の九州熊本縣下にも、之と同じ様な泣き女を葬儀の時に列せしむることがあると云ふことも聞き及んでゐる。何れにしても支那の喪家ではその悲しみを巧みなる泣き女に頼み込みその方法に依つて、一層哀趣を増させるやうにしてゐることは云ふまでもない。恐らくは遺族が哀悼の氣持を宣傳する方法として、一等有効なものと考えられてゐるのである。ところが江南地方に行つて見ると民家では、喪中一年、晚春の清明節の頃となると、各戸は晝となく夜となくぶつ續けに奏樂を墓前に演じ、時折聞こゆる僧侶の讀經の音はゆかしく感ぜらるゝけれども、その近所界隈の迷惑

も構はず、夜半銅鑼や鐘、太鼓で囃し立てられるには少なからず困らせられたのである。かうした鳴物入りのやり方は泣き女の方法以上に亡者に對する厚き禮になるわけではあらうけれども、甚だその形式に過ぎた感じがしてならなかつたのである。

七十九 偽せ乞食

支那の乞食連中は道を行く紳士をさへ見れば、當然哀れを乞ひ、錢を貰ふの権利でもあるものと心得てゐるらしく見える。若し其の中の一人に一文の銅貨でも與へるとあとどれ位の乞食が現れて来るか分らない。山東の泰山に登つたことのある者は、其の麓の一天門附近で無數の乞食に取り巻かれ又路傍民家のかみさん達までもが提籃を提げ娘を伴ひ登位の雅客をつかまへ盛にねだつてゐる光景を見られたことであらうと思ふ。

その他杭州西湖の寺々や又北支那各地の名所舊蹟に待ち構ふる乞食の多いことはお話にならないことを見られたであらう。併し日本の乞食と異つて頗る感心させられる所はその客を見て努力をす

ることの大なるものがある點これである。江南の橋上に現はるゝ乞食を見てもその石の上に頭を打ちつけ、鮮血の流るゝのを見せては行人に哀れを求めて止まないのである。或は車上で飛ばす紳士の姿を見ては大道にばかり打ち伏し、其の血を見せるのである。さうして胸の中ではこれ程までに努めてゐる自分に對して銅幣の二枚や三枚を施さないと怪しからぬ。紳士として何とかしなくともよろしいのかと云つたやうな態度で迫つて来て止まないものである。

又上海の城内には盛夏の頃路上に立ちんぼしてゐる乞食で自分に大きな團扇を持つてゐる手合が彼方此方と人の姿を見比べてゐて、いざこの人ならばとよく見定めがつくと云ふと後から扨いて行つて之を頼みもしないのに煽ぎ立てるのである。中には人力車で飛ばしてゐる客を後方から鰻の蒲焼でも作る時の煽ぎ方のやうな工合にバタバタ音を立てゝ煽いでゐるものもあり、何處までもついて来て止めない。結局はその努力に對する報酬を當然らしく要求して來るのが落ちである。

斯様に支那乞食はその努めるとなるとどこ迄も努め、殆んど扁蟲の如くに喰ひ入つたら離れないのである。一體かうした乞食は本當に支那で呼ぶ、ホワツ花子と云ふものに該當してゐる者であるが

國によつて言葉が違ふと妙なもので日本のハナコ花子と云ふのが支那では乞食に當たるのである。身に襤褸を纏ひ、寒中路傍で凍死する如き花子もどつさりあるのである。尤も支那には眞に酷いなりをした乞食と、相當ななりをしたのと二種類がある。其の極端に汚い乞食や癩病の乞食と云つたやうなものも亦少くならず、路傍に見出されるのである。

其の何れの種類の者もそれ／＼愛想はよく行人に對して藝當などを演じ、哀れを求めることに於ては中々ぬからないのである。ところがこれ等の乞食はそれ／＼その所屬の勢力範圍と云ふがあつて、其の界限の親方に統率されてゐるやうである。塵芥箱から拾ひ集めて來た石炭屑物など苟くもそのかねになるものは錢になすべく、親方の指圖を受けるやうに努めそして寒中空腹を凌ぎ凍えないだけの心配をして貰つてゐるのである。

支那の乞食と云つても馬鹿には決してならぬ。中には嫁取り婿取りと云つた洒落た祝をやる者がある。橋の下河原あたりで婚禮の式を擧げ、乞食仲間を呼んで不相應な御馳走を振撒いてゐると云つたやうなものもある。これらは支那綺談の一つとして傳へられてゐるのである。かやうな有様で

あるから乞食風情と云つても支那ではさまで行き詰つて居ると云ふ譯でもなく、たとひ日本の乞食以下に下つてゐる酷い手合でも、其の心の持ち方は頗る呑ん氣であり顔にどことなくこ／＼した陽氣な氣分をたゞへてゐるのである、これは乞食ばかりの性分でもないがしかしかれらも大變得な性分であると評してもよいのである。

八十 賭博三昧

賭博と云へば支那では(一)食ふこと、(二)呑むこと、(三)放蕩、(四)阿片の道樂と共に支那人生活中最も興味ある道樂の一つとなつてゐるのであつて、いくらでも此の賭博には打ち込んで止めると云ふことはないのである。支那の賭博にはいろいろ種類があるが、一般に行はれてゐるマーヂャン麻雀から奥地の方に知らるゝホンパウ紅寶の遊びに至るまで、各種各様の賭博法がある。賭博三昧に耽る者はその技術の如何よりも、體力の強壯の點と云ふことに重きがおかれてゐるのである。これは連日連夜続けさまにやる爲め勢ひその技術の點よりも體力が尊ばれるゝに至つたものである。尙

技術の點では支那全體で寧波人が一等優秀であるとの呼び聲が高い。マーチャン麻雀と云へば支那では天下に公認されてゐる遊びで貴賤老幼何れの人も之に耽らない者はなく、全くのナショナル・ゲームとなつてゐる觀がある。否、賭博は之を罪惡と見るものはなく、贈賄の一方法に轉用することもあり、賭博に依つて客を勝たせ自分で負けておく如き隠れた心理作用も働いてゐるのである。船に乗つても、汽車に乗つても暇さへあれば之に耽り、其の旅費を稼ぎ出す許りでなく、非常な儲けをなす者があるのである。さうして道樂の末途には賭博を立派に職業化させてゐる輩も少なくないのである。

上海で有名なパウマーチャン跑馬場即ち競馬場の馬券の如き當たつたならば一躍二十六萬ドルからの富を握れる。近來又明園等の犬の競走も始まるに至つたが、支那の社會は今日の如き革命の功未だ成らざるの世には、其の風雲に乘じ天下に名を成し、志を得んとする者が多い。これらは皆一つに大きな賭博を夢みてゐるものと評せられるのである。

今日學校の卒業生が、其の職の得られず生に安んずることの出來ずして風雲に乗せんとするもの

多いのは正に支那中原を舞臺として最も大仕掛な賭博の演出を待ち構へてゐるにもくらべられるのである。然かし更に南洋の天地に進まばもつと大きな勝負事が演ぜられてゐるのを見るのである。尤も南洋には確實な仕事を握つてゐる華僑はたくさんゐる。けれどもその仕事以上更に數百萬數千萬の賭博に耽り、一躍一億の桁に達すると云ふ世界的富豪となつてゐる者も多々數へられてゐるのである。要するに支那の人々には此の世を超越して考へてゐるものが多く従つて人生を一つの芝居と見て其の生涯を以て賭博で終始すべきものだ位に考へてゐる手が少なくないのである。貧民窟の幼兒が母から銅錢を貰ひ、毎朝路次に這入つて竹の筒から籤を引き、飯にあり付いてゐる如きも、事は小なりと云へども此の間の消息を物語つてゐる一例と見られてゐるのである。

八十一 祕事嚴守

人は人たり、吾は吾たりと云つた氣分は、支那人一般に共通せる心理状態の重要な部分であるが、分けてかれらが自分達の仲間の事になると、一層嚴密に其の點に極端な祕密を守らんとする態度を

見せるのである。もとより仲間同士で一致共同の自治をやつてゐる場合には最も嚴重に彼れ等の間の秘密を守るの必要があり、又人の身上に迷惑を及ぼさないやうにすると云ふことの道義心も起つて來るのである。例へば仲間で斷々乎として一致の同盟罷工、或は同情罷工を行はんとする時の如き、その仲間たる紡績工人共はそれ／＼よく自己の秘密を守り、一滴の水も漏らさない様にと互によく警戒をし一糸亂れず全體としての行動を全うするのである。されば昨日までは幾萬の工人が工場を一齊に運轉させて居つたとしても工人相互の利益を確保する或る種の話が成立でもしたならば一人の之を裏切るものなく今日から鮮かに罷工をやつて見せるのである。その點は自分達をして一驚を喫せしむるものがあるのである。

又その彼れ等の間に通信連絡の良く取れてゐることは實に感心の外ないのである。ひとり紡績のみならず上海の電車罷業の如き、又ワンパウツオ黄包車人力車罷業の如き或は郵便罷工の如き、誠に皆徹底したものである。時には實につまらない問題で、例へば人力に石油のかんてらを點じないと云ふ同盟の如きものでさへも可なり嚴重に之が守られ、蠟燭を態々點じてゐたのであつた。之が

爲め西洋婦人はスカートの裾を焼かれた者などもあつて困つてゐた。其の他料理番の間に行はれる毒藥の秘事の如きもこれ亦頗る連絡がよくとれると云つた風で、如何に眼に一丁字なき労働者連中と雖も、秘密の嚴守と云ふ一點に於いては、實に驚くべきものがあるのである。殊に之が外人に對する對外運動のことゝなる場合には、一層嚴密に行はれるのである。今や三民主義を擁して國民黨中央執行委員たちの間に政治組織もどうやら形を整へかけ全國的にその緒に着かうとして來たのであるから民國萬民も何とかして之が破壊的の社會運動などをやめて歎然として國家の大本樹立に向かつて進み行かんことを希望してやまないのである。

八十二 手品の機智

世界に支那人位ごまかしの巧妙で、入神のものはあるまい。ごまかしの巧みな民族は手品がうまい。手品の上手い民族は人の注意を轉換させることに妙を得てゐるのである。大道でやつてゐる支那人の手品を見てゐると一方に盛んに無駄を喋つてゐるかと思ふと、地上に擲げられた大風呂敷の

下から大きな生きた蛇が匍ひ出して来るのである。

初めその扇で以て風呂敷の布切を暫く叩いてゐるやうであるがその下から何となくかねの音が次第に聞こえて来る。次第に持ち上がつて来るに従ひ布切は中央に圓形のものがあるらしく段々と高く持ち上げらるゝのである。やがて手品師はその布切を取去つて見ると五徳が出て来るのである。その五徳を又取去り再び布切を地面にそのまゝ置きその上から又扇を以て之を煽つてゐる。かくて度々その地面に仕掛けのないことを改めて見せるのであるがそこには何物もない。けれどもやがてしばらくお喋りをしてゐる中に布切の下から大蛇が割れた舌をべろ／＼出して躍り飛び出して来るので一座をびつくりさせるのである。

支那人の手品には尙この外水を入れた小さなコップをおきその中から幅の廣き青天白日旗を幾つでも出して、客の目を驚かして見るとか、又は古代に諸葛孔明の時代からのものであるが戦時に敵が何れの方角から攻め寄せつゝあるかを探知することの出来る秘法等に用ひられたものなども研究せられてあるのである。これはむしろ手品と云ふほどのものではなくて、土中に埋められた壺様の

無線電信式の装置をしたものであるが、之に耳を當てゝおれば遠隔の地點にある敵軍の足並みの音でも何でも手に取るやうに探知し得られるのである。

すべて支那の手品はたねが容易に分らないものだから一般観客は欺れ易いのであるが、其の手品をやる機智に至つては恐らく天下一品の稱を與へてもよろしいのである。支那人のその口舌の雄と云ひ又その手の使ひかたと云ひ注意を他に反らせる機智と云ひすべて手に入つたものであつて感心させらるゝのみである。自分はこゝに多大の禮讚の辭を惜しまず呈しておきたいと思ふのである。

八十三 喇嘛寺に見る罽𦘳杯

北京は宮城武英殿の陳列品を見てゐるとその中に内壁にきらびやかな黄金を塗り、外壁は自然の儘にしてある罽𦘳杯がある。見やうに依つては氣持のよくない大杯であるが、しかし又見方に依つては周圍の工藝美術に對して一層鮮かな色彩を見せてゐる特別の名品であるとも云へるのである。雍和宮に參詣して、其の御本尊の佛像を拜する時にも祭壇に供へられたあまたの罽𦘳杯に酒の盛

られてあるのを見る。かうした供へ物が北支那では普通の酒器を用ひず頭蓋骨の大杯を用ひてゐるのである。又最近奉天の公園で郭松齡その人の頭蓋骨に雪を積み込み公衆の面前に曝されてあつたことは、讀者の記憶に新たなことであらうと思ふ。又之に負けない話は、曾つて天津の眼抜き場所で行はれた重罪犯人の死刑のやりかた、それに又江南の田舎の墓陵に曝らされた小兒の白骨のことや、又南方福建省あたりの田舎に見ることであるが親の死體を年忌に墓穴から取り出し、孝子が之を江岸に持つて行つて、腐爛した肉を洗ひ去り、清き白骨のみにまよめて、之を骨壺に納めると云つたやうなこと、これらの奇習は考へ様に依ては何れも皆頗る残忍性を伴へるものゝやうに評されるかも知れぬ。

しかし支那ではその地方々に古くから行はれてゐる習慣はたとひ奇習にもしろ之を今日絶やさないやうにしてあたり前のことゝ感じてゐるのである。食卓に見る牛骨の箸の如き之を考へ様に依つては種々な聯想が呼び起されるのである。けれども、今日では象牙の箸の考と相並び殆んど何等氣持ちのわるい考を起すことはないのである。鬮體杯が支那の社會で、一種の残忍性を連想せしめ

る如く見るのは、日本式の考へに過ぎないのであつて支那のその方面の間では何とも感じてゐないのである。

その宗派なりその地方なりに入つてその内間のものとなつて考へる時は殆んど、當たり前のものとなり少しも異様に考へなくなるのである。

八十四 六神丸の生肝

坊間傳へられる所に依れば、支那の習俗で臨終に頻せる大病人に對して六神丸さへ與へることが出来れば、息を取り返すことはむづかしくないとまで云はれてゐる。ところが此の丸薬は人間の身體から取つて作つた物だと云はれ、死した瞬間に取つた肝から作られ之に多少の砒素が加へられてゐるのだとも云はれてゐる。

最近濟南の修羅場に見えた死體の中にはその筋骨を破り肝臓を取り出した形跡のある慘憺たる寫眞を幾多も見たのであるがこれ等は云ふ迄もなく六神丸の材料に取られた者らしく考へられる。其

の他支那街では時折朝の景色に門前の石段を枕に死體の倒れてころがしてあるのを見る。ボーイは首筋を掴まへお隣の家の方へ引寄せておく。そのうちにいつ方へか取り片付けられしまふのである。その外支那では、牛羊豚等の家畜を屠る場面が衆人環視の中に取り行はれるのであるが、その爲め五臟六腑の位置など生理的方面のことが比較的よく知られてゐる。このことは平素支那街を歩いて見てゐるとつくづくその方面の實感を得るのである。

八十五 君子は庖厨を遠ざく

君子は貧を憂へずとか云はれ、いくら赤貧洗ふが如き境遇に陥つても支那人はそれをそれほど心配しない。そこが君子であると教へられてゐる。其の他君子は危きに近づかずとか、又君子は庖厨を遠ざくなどと、君子の心的状態に就いて古來色々述べられてゐるもののがかなり多いのである。

君子が残忍な場面を見ることを好まないと云ふのは當然のことであつて成るべく羊や豚、鶏、魚などを殺す場面には近づかないやうにするのである。これが又君子の徳の一つに數へられてゐるの

である。事實支那では上流中流の家庭では、臺所は書齋と距離があり、又肉屋の近くには君子は家を持たない。自然その物凄しい場面を見せつけらるゝときは御馳走が美味しくない。又子女の教育にも悪結果を來たして來る故宜しくないのである。

支那の社會を悪化させると云ふことには、これ等庖厨に見慣れ残忍酷薄な場面をいつも見てゐて無神経に又無頓着になつてゐる結果から來る場合が多いのである。君子はどこまでも温乎として玉の如く、常に君子然たるを失はず菩薩の如き心持ちを持つてゐるべきである。又さう云つたその心掛けが、君子其のものの人格を作つてゐる最大要素でもあると云へるのである。

又實際社會の方から之を見ても、君子の相貌は其の眼尻が下り、髭は其の兩端が垂れて、一種温容人に迫るものがあるのである。それ故世に君子は庖厨を遠ざくと云ふことは、君子の氣分を代表してこゝに現はしたものであつて、所謂残忍性が世に幾多の害毒を流す結果になることを注意し、自ら惻愍の心を以て臨まなくてはならないと云ふことを教へてゐるのであると思ふ。

十二
閻
魔
鏡

八十六 秦の始皇帝の英斷を想ふ

群雄の割據して、天下の中心が各所に分れ分れになつてゐると云ふ時に當たり拔群の英傑の現はれ來たるときは、斷々乎として之が快刀亂麻を斷つの勢もて、一と思ひにやつ付け、こゝに統一ある政治組織の基礎を固めるやうにしなくては嘘である。支那の天下は時にそのやり方をよく目に見せることが必要なのである。支那の國家社會は見方によつては之をたゞ自然の成り行きに任せて置けば如何なる事態を生ずるかも分らないと云ふものがあるが、併し支那は成る様にしか成らない國である。あまりやり放しも困るが大體は大勢で行くのである。如何に英雄豪傑が現はれて快刀亂麻を斷つと云つて見た所で大勢に逆行しては成功しないのである。見事に太刀を振つて見るのもよいがそれは永久に亘る根本策では無論ないのである。

併し萬里の風雲に乗じて向ふ所他人の追従を許さぬ壯圖をめぐらし、自分が思ふ存分國家の建設

に努力し理想を實現して見ることはこれ又男子として何よりも痛快なことである。春秋戦國の後六國をなぎ倒し、こゝに天下統一の大業を完成したる秦の始皇帝の心事は實に痛快なものがあつたらうと思はれる。その巴蜀の天地に斬然現はれ割據せる群雄を見るまに統一してしまつたと云ふやうな方は、一つには時勢の然らしむる所でもあつたであらうが今一つには始皇帝其の人の辣腕にあつたとも云へるのである。

始皇帝の天下を統一するや、急遽文物制度の基礎を定め、儒者と云ふ儒者は悉く坑に生き埋めにして政治を論ずる口舌の士に對し一と思ひに止めを刺してしまつたのである。始皇帝の短氣なる性質は春秋戦國時代の議論百出の場面に對し見て見ない振りが出来なかつたのである。議論を立て理窟を云ふ人間は天才であらうと、何であらうと之を坑にして、埋めてしまひ自己の思ふ通りの國家社會をこゝに建設せんとしたその英斷振りには實に支那を舞臺とする皇帝のふさはしい壯舉であると云はざるを思はない。今で云ふならば所謂土豪劣紳を南方で片ばしから銃殺の刑に處したやり方にも比ぶべき行り方であつて、亂世にあたり一刀兩斷に事を處理するのはこの方法に限るのである。

固より當時は鼻を切つたり、睪丸を削いだり、甚だしきは車裂の體刑までをも行つてゐたりしたことは、史上著明な事實である。由來支那は蘇秦張儀の如き國際的策士の辯舌を以て鳴る者もあつたがとかく高等遊民ののさばつて來るときは天下國家は亂るゝにきまつてゐる。これは歴史を知る者の痛切に感ずるところである。殊にその亂世に當たり智者が勝手の熱を吹き、世を攪亂して來ると思想が益々悪化して來るのである。それ故、文字あるの士が理窟を並べ、餘計の議論をするものは片つ端から之を殺戮する。こはその頗る亂暴の如くに見ゆるけれども、亂世の時には已むを得ない手段と稱せざるを得ないのである。

反面から見るとこれ等の智者學者が自己の存在を示し飯を喰つて行くには口舌に依つて職業を得るの外に道はないのである。彼れ等が若し沈黙を守り活動を中止するやうなことであつては、忽ち飯が喰へなくなる。それ故一見ぶらぶら遊べるが如く又活動せるが如く何とも知れぬ高等遊民的の生活を送つてゐる。こゝには、同情すべき點もある。しかし支那社會の裏面には、斯うした遊民階級言葉を換へて云へば讀書階級の手合が滔々、常に大禍をなしてゐるのである。それ故その大勢に

對して生まぬるい緩慢な態度でゐては、到底纏まるの時期を掴むことは出来ないものである。殊に支那中原の廣大無邊なる境域には、燕の地方と云ひ、齊の地方と云ひ又楚と云ひ、互にその相懸絶の程度と云ふものは非常なものであつて、かう云つた懸絶せる僻陬の地方に於て見ると云ふと唯單に皇帝が儒者を坑にしたと云ふ丈の風聞鶴唳を耳にした丈でもそれで相當の効果を現はすものがあるのである。

實際今日の支那の舞臺から見ると、今は亡んでしまつたがあの奉軍の北軍と蔣介石の南軍とが如何に鎗を削つて激戦をやつてゐても、奥地の方の四川の人民あたりは殆んど無關心で蠅が止つた程にも考へないのである。されば始皇帝の英斷と云へども、之を實際に徴して考へて見ると殊に古代の交通の今日以上によくなかつた點から見れば大した事はなかつたであらうと察せられる。歴史上に傳へらるゝ始皇の儒者を坑にした英斷は英斷に違ひはないが之に對する吾人の感じは唯後世の人の感想に過ぎないのであつて、當時の社會には左までの影響もなかつたのではあるまいかと思ふ。始皇帝の武斷政治もつまりは永續はしなかつた。そしてやがては抑制が利かなくなつて、南方揚子

江沿岸にはあの通り陳勝吳廣の徒が先づ兵を擧げて叛意を示すに至つた次第である。いかに高壓手段もその効果を永く持たせるやうな工合にはいかないと云ふ事はこれ丈でも明白に判るのである。

八十七 黒幕の讀書人

支那の國家を隆盛ならしむるも、又之を攪亂して遂に滅亡に導いて行くにも、常に讀書人の仕業が多きに與かるのである。宋の世の末路が朋黨に依つて遂に倒るゝの止むなきに至つたのも、たしかに朋黨即ち讀書人階級の跋扈にあつたと云へるのである。支那の天下にとつては、朋黨は一種の劇樂の如き物で、之を少量利用する場合には著しく効果を現はすも其の度を失して其の跋扈するがまゝに委して置く時には、遂に當然滅亡を招くに至るのである。

又清朝の末期はかくの如く國政の振はず、次第に凋落の形となり康熙乾隆の黄金時代の名残りだも見られなくなつた。烟眼張之洞翁は之を嘆き何はさておき人材養成の必要を感じ、こゝに勸學編を奉り、教育の刷新を計ることを根本方針として盛んに全國に亘り育英事業や海外留學のことを力

説し且つその道を開いたのであつた。それ故天下は翕然として之に向ひ局面は一變して來た。爾來教育熱の勃興を見人材登用の聲は青年のモットーとなつた。そして從來の科學の制度はこゝに廢止せられるに至つた。斯くの如くして清朝末期の復興と人智の開發そのことは前代未聞の盛況を見るに至つた。そこまでは好かつたけれども、其の人智の高まれば高まる程、滿人朝廷頼むに足らず、宜しく滿人の天下を倒して吾人漢族之に取つて代はるべしと云ふの氣運を醸生する結果となつた。而かもその輿論は益々高まる一方で哀れ滿朝の國家は年一年と危きを加へ、遂に川漢鐵道國有論をきつ掛けに武漢の天地はさわぎ立て第一革命の叫びはこゝに擧げらるゝに至つたのである。

その人材登用の事を叫びたるため清朝にとりゆゝしき重大局面を誘致して來たと云ふことは、恐らく張之洞自身にとつてもその豫期しなかつたことであらう。けれども結果から云へばその當時の讀書人が大いに志を述べ身を立てるに絶好の機會を得たやうなものとなつたのである。それ故今日武昌城内の蛇山パオピンタン抱氷堂の祠堂には張之洞先生の肖像を掲げ、之を幾久しく祭つてあると云ふわけである。

斯様に見て來ると中華民國勃興の最初は一つに、これ等讀書人階級、學生青年達に依つて大いに力を得たものと云へるのである。今後と云へども尙讀書人の前途は見方によつては大いに期して待つべきものがあると云へるのである。

八十八 復辟の夢

「我れに與ふるに五百萬元を以つてせばこゝに復辟の夢を實現して見せん」とは數年前まで北京一流の策士連が豪語してゐたモットーであつた。時北京地方を漫遊してゐた自分達は屢々之を耳にしてゐたのであつた。清朝亡んでこゝに十幾年而かも復辟を以て一つの請負事業となしてゐるものも多くその廢帝宣統皇帝とか恭親王とか其の他王族を賣り物にし、一と芝居を打たんとするの士は隨所隨所に懸れてゐた様子である。

今や張作霖の没後、軍閥の聲望全く地に墜ちたるにも拘らず尙道路に復辟の流言を試みる者の現はれ滿州の一角に淡き復辟の夢を實現せんとしてゐる手合せへもある。併しつら／＼考へて見るに

支那は連年の内亂を避けて南洋方面に落ち延びて行く氓民があり、殊に福建廣東の不安に惱みぬいてゐる豪商達は、吾人の豫想を全然裏切り意外な考を胸に納めてゐるのを知るのである。と云ふのは次の様な事實が吾人をして感愾無量ならしめてゐるのである。

かつて宣統皇帝が住み慣れた北京紫禁城内の深宮から、李石曾一派の策動によりその退出を餘儀なくせられ身を以て宮城を逃げ出し公使館區域に難を避け、芳澤公使の所にかくれこゝで佗びしい亡命生活を送つてゐられたと云ふあの際のことである。思ひも寄らぬ手紙が續々と廣東南洋方面から舞込んで来る。何れも宣統帝に當てられた無記名の書面であつて、開いて見るとかうである「自分は新聞を見て眞に皇帝の身の上をお痛はしく御察し申上げる。民國の世になつて既にこゝに十幾年、未だ一日として寧日がない。連年の秕政に最早や愛憎が盡きたのである。どうか皇帝には再び復辟の大業に就かれ清朝の御代を再興して頂きたいとの情の切なるものがある。こゝに自分たちの微意の存する所を現はす爲め僅か許りの慰藉料であるが金千ドルを爲替で同封して置きましたから御受納して頂かば本望であります」云々と見えてゐるのである。

斯う云つた爲替は一本や二本ではなく舞込んで来たのである。當時公使館にゐた自分の友人共は、此の状態を見て、廣東の如き最も新思想に走つてゐる革命の本場から廢帝に對して、かくも血あり涙のある情熱のこもつた爲替を寄越して来る者があると云ふことの一事を以て見ても、如何に未だ復辟の氣持が四百餘州の隅々にまで残つてゐるか、又それと同時に民國の政情に對して限り無き怨を以てゐる暗流の閃きがあるかゞ見出さるゝのであると云つてゐた。願ればかの張勳が南京で死して以來復辟の策動はともかくも期畫的に頓挫を來たし僅かに廢帝宣統帝を中心に今や天津で清朝の遺臣陳寶琛、劉驥業、羅振玉等の學者、守り役共が日課の如く馳せ參じて、廢帝の御慰さめをしてゐると云つた程度で、誠にお氣の毒な生活を送つてゐらるゝと云ふ次第である。

中華民國の初年に袁世凱が清室へ約束をした百萬元の年金も、何日しか支給せられなくなり、清室の金銀重寶は蒙塵後、清室善後委員の手で處理せられ、殆んど大部分廢帝の手から離れて了ひ、その後僅かの殘品寶物を賣つて居喰ひをしてゐられたのであるがそれも今では居喰ひをしようにも品物に窮すると云つた程度にまで成り下がり、これが世が世であつたなれば、蝶よ花よと持てなさ

れる御身であるが丸で反對に殆んど息の詰まる様な亡命生活を送つてゐらるゝと云ふありさまである。いかに復辟など騒いでも全く夢物語に外ならぬ情勢に變つて來てゐると云ふことは、返へすがへすもお氣の毒な次第である。

因みに復辟と云へる言葉については、今日清朝の御代を再興するの意味にとられてゐるが、もと二千餘年の昔、辟は君なりと爾雅にも見えてゐるのである。されば其の君を舊に復するの意味から之を復辟と云ひ、その運動を復辟運動とも稱するわけなのである。尙辟の字に就いては詳しい説明は上に古代文字のところでも字源に遡つて説明をしておいたからこゝには省いておく。

八十九 宦官の末路

古代の支那歴史を繙いて見ると、周代に宦人と云へるものがある。普通こは門番の意味に取られてゐるが、其の人の採用せらるゝ時には豫め去勢せられて然る後に用ひられてゐるのである。その點から云ふと、こは後世の宦官と共通なところがある。最近まだ宣統帝が宮中に居られた頃までは

清朝三百年間行はれて居つた宦官の制度は尙依然備つてゐた。大奥の榮華の生活は一つにこの宦官の多數に據つても想像せられ、宮女花の如く春殿に満ちてそのたをやかな姿を渡り廊下に現はしてゐた邊りの光景と云つたら、一幅の繪巻物活動フィルムにしたやうな感じがするのである。

事實眼の當り北京紫禁城内の宮室金殿玉樓を拜しその渡り廊下から居間寢室、すべてに亘つて輝く金色燦爛たる輪奐の美を眺むるときは、如何にその宦官、宮女の背景美が龍宮世界のそれに比すべきであるかを思ひ浮ばしむるものである。併し宣統廢帝の宮中脱出の幕に先き立つこと數年後宮の一部の寶物殿は炎上の悲運を見たり、或は又重寶紛出の不祥事を見たり色々のこと頻々と起つてゐたのであるが大奥の祕事は常に雲深くして外に漏れる機會が少ないのである。その間實に複雑したる内情の鬱積するものもあつたであらう。そこに突如として宦官と云ふ宦官をすべて宮中から解いてしまふと云ふ英斷に出でられたと見え、ぞろ／＼首になつた宦官ぞちが住み慣れた大奥宮闕から流れ出て行くのである。

これら宦官たちの落ち着く先は中には身寄りのちゃんとした者のあるものもあつたであらうが、

傳へ聞くところに依ると大抵は北京の北隅孔子廟、國子監から安定門邊りの民家の路次に姿を消したと云ふことである。其の爲めでもあるか、北京の北部を散歩してゐると、賤しからぬ人品で、さながら貴婦人にも似たる瓜實齋の頬をした宦官風のものが清姿を見せて大路小路の柳の蔭、胡同の曲り角などに動いてゐるのに出くはすことがある。元來宦官の仕事と云ふと宮中大奥の御姫様達に仕へ、女官と一緒に大奥生活を送るに在るのであつてその數も幾百人から上つてゐる。云ふ迄もなく兎角大奥生活には幾多の罪惡が行はれ、時折御家騒動まで引き起すと云つた活劇を見るのである。女官達の方には如何にその身上に曰はくがあらうとも、之がからだに立入つて卵巢まで取り除かれたと云ふ話は聞かないが、宦官の方は昔からその豫め必ず去勢されてから官仕へをするものと規則で決められてゐるのである。ひとり去勢される許りでなく、肝腎な、局部までも付け根から切り取られてゐると云ふ話もあるくらいである。尤もこれは周代の頃から官刑と稱して刑罰として行はれてゐたものである。が宦官の場合には刑罰ではなくして官仕への第一條件として先づ行はれたものである。醫學上や又は實際上から之を見ると、男性は去勢せらるゝときはそれと同時に、聲帯が女

のそれの如くなつて来て、鶯を欺く涼しい聲に變化し、艶消しの聲は次第と清らかな音色を持つやうになる。そして容貌に強いところがなくなりいつしかたをやかな曲線美と變はり溫和で觸はりの良い氣持をたゞへるに至るのである。従つて坐作進退までがすつかり官仕へに適當した優美な趣を見せ、丸で一見男性的要素と見らるべきものは全く失はれるのである。されば姫御前に仕へ女官に交る身としては誠に恰好のものとなりてゝ宦官としての資格が出来るのである。

支那の奇習は此の宦官官仕への話くらゐ世界に珍らしいものはない。人間として我を犠牲にして公のためにその事に従ふ場合も随分あることであるけれども、宦官になるに男子としての我を畸形にしてまで官仕をすると云ふことは餘程の決心をした上でなくては爲し得られない問題であらうとむしろ同情の念に堪へないのである。

九十 家付き忠僕の共犯

絶對信用を得て、主人や主婦からひどく譽められ、主人の遠方へ轉勤する様な場合には必ず之を

我が子同様に連れて行き、全く昔しから十年一日と云ふ語の示す如く、十年二十年を一日の如く忠實に働いてくれてゐた忠僕が江南の友人のところへ来た。もと天津の生れであるが北支那から主人の江南地方に移つて來るときつれられて來たものである。いつも毎朝の掃除、庭内の掃除、料理の手傳、雑用など小まめに好く働き、其の心根も正直。たゞ阿媽のする仕事と自分のする仕事とは常に畫然と區別をしてゐたやうであつたがこれも當り前のことである。兎も角も支那には珍らしい忠僕であつて、我れわれも始終之を譽めちぎつてゐたのであつた。さうして永年溜めた貯金も相當の額に達してゐたし、體格は好し、身装も相當、押し出しの利く男で氣立も支那人としては良い方であつた。ところがどう云ふ魔がさしたのか、色の道と陰謀だけは思案の外であると見える。細かい事情は分らないが、恐らく他から頼まれて止むなく共謀に加はつたのである。詳細のことは省くが或る日の事、罪なき其の主人を巧みに當人自身の手で殺害してしまつたのである。心を許してゐた家族の者共はまさかあのボーイはそのやうなことをする人間でないと思込んでゐて未だに相變らず固く信用を置いてゐるのであるが、事實其の忠僕の犯罪をやつたと見なくては外に説明が付かな

いと云ふ珍事が突發してゐるのである。

斯う云つた種類の出來事は、新聞の上にもまゝ見るところで、珍らしくはないのである。家族のものゝ信用してゐれば信用してゐる程、堅く律義になると云ふのが忠僕としてのメンツ面子を重んずる所以である。又其の點に吾人は民族性の美點を感じてゐるのである。けれども、十年の信用を僅か許りの外部の誘惑に迷はされ、遂に折角の信用を臺なしにしてしまひ、官憲の手に渡たされ、罪人となり下がるやうなものが偶まにある。何故斯様な物凄しい残忍性が支那人には急轉直下に現はれて來るのであるかと云ふことは、心理的に見てよく分らないのである。けれども民族として見る場合には、彼れ等の祖先の血の中に、必ずや残忍性の要素が潜在してゐたに決つてゐると解されるのである。

當人自身からだには大した魔心は宿つてゐなくとも、何代か前の隋性が周期的か又は突然に現はれて來て、遂に共犯を敢へて行ふに至つたものと解釋されるのである。固よりこれは一般中國人に適用されるべきものではないと思ふ。大體から云へば、これは滅多にないことである。自分は支那が

「イの肩を持つわけではないが日本のボーイ達はとかく理窟が多く、成功心とか向上心とかに餘りに燃えてゐる處があつて、家に居つかず又主人に懐かしみを持つと云ふ傾きがない。其の點になると支那ボーイは理窟を云はず、唯ちやんと決めた通りのことだけは全く機械のやうにそれこそ十年一日の如くやつてくれるのである。祖父の時代から世襲的に従僕を勤めてゐる如き、珍らしいものもゐるのである。そしてその向上發展などのことは初めから問題にしてゐないのである。

眼中唯主人、奥さん、ぼつちやんあるのみと云つた様な、誠に模範忠僕とも云ふべきものが支那の社會には多いのである。側面から支那の社會を見らるゝの士は自分とこの點に感想を同じうせらるゝ方が定めし多いことと思ふ。以上は共犯の忠僕に對する他の反面の事實を紹介し多く日本人の考へてゐる誤解を除いて置きたいと思ふ次第である。

九十一 廬山の轎子

上海から長江を廻る事三日、又漢口から長江を下ること一日にしてキウキヤンの奥、廬山の名勝

に達することが出来る。廬山は九江から八哩自動車で蓮花洞まで行くと廬山の麓になるのであるがこゝには數多のチャウツ轎子が客を棕鳥と待ちかまへてゐるのである。

こゝは丁度日本で云へば昔しの箱根八里の雲助の出たやうなところで慣れぬものはいつともひどい目に遭ふ。西人などが手ぶらで無難でさつさと登山してゐるのを見ると羨ましく感ぜらるゝが大抵荷物のある者はこゝで足許につけてまされるのである。そして、公館で規定した運賃の相場はきまつてゐても出鱈目を吹きかけ旅客を弱らせるのである。荷物の二個三個とある旅客に對しては悪轎子の來たつて之を奪ひ取らん計りそれ〴〵自分の仕事にしなければ止まないものである。そして共謀してこちらに當たつて來る。多勢に一人ではとても叶はぬ。そこを付け込む。時にはからだ丈は轎子に乗りたるに他の轎夫は袍を土足で踏ん張つてしまつていつかな渡さう景色も見えない事さへもある。すつたもんだで大騒ぎをやるのが普通である。又夜半に一人で下山するものが頓だ椿事を演じ裸かにせられた話もよく耳にしてゐる。そこで山では日本人に誰れ云ふともなく増田久次郎翁をかう云ふ時の守り神と頼んで來る。大元洋行の主人公である。翁の大喝一聲は實に雷鳴よりもよく

きくのである。又よく手なづけてもゐるのである。

或は又考へたものは殆んど無言のまゝで云ふがまゝに轎子に乗り荷物も黙まつて載せておいてさ
てクウリン牯嶺の避暑地増田翁の大元洋行の門前に行き着き翁に頼みて然るべく見計らつて拂つて
おいてもらふのである。この手を知らぬものは随分雲助を相手に餘計の喧嘩をしたり立腹をしたり
不愉快な思ひをなすのである。折角の天下の名山廬山は數度自分の登山してゐたところ迄はよかつた
が最近南軍の長江に出て以來は三民主義の空氣の横溢と共にどうやら山の外人別荘地はひどく荒ら
され境内なども勝手に侵入せられ見る影もなくなつてゐるとの情報を耳にする。でも外人にしてそ
の後盛夏に之に登り避暑したのもあるやに聞いてゐるから評判ほどのこともないらしく思はれ
るのであるがともかく廬山の轎子はさながら箱根の雲助を支那化したものと考へればよいので日本
人には特に印象の深いところなのである。

九十二 恐るゝに及ばぬ内地の行脚

支那内地へ奥深く入らば屹度やらるゝであらうとは教育のある日本人の萬人が萬人皆異口同音に
唱へてゐるところであり、又常に自分共に注意をしてくれる言葉でもある。

固より田舎へ這入ると此の頃も寧波行きのシンキャンテン「新江天」の船に乗つたところ土匪の
親方らしい色の黒くて頸の太い目の鋭い男と同室になつたのである。そして時々その男が他の客に
話してゐるのを聞いてゐると、

日本の田中内閣は打倒してしまふべし。

帝國主義だからいけないのだよ。

トンヤンニン(東洋人)がゐれば片つばしから海に抛りこんでしまへ。

などとやつてゐるのである。こゝに東洋人とは日本人のこととかくの如く手荒いことを口ずさん
でゐることは減多にないのであるがたまに之に出くはしたのである。そのチーフアン吃飯のとき卓
を共にして料理を一緒につゝいてゐると色の黒いのは紅いウーチャビ五加皮をなみ／＼ついでがぶ
がぶやつてゐると云ふ土匪然たるところを飽くまでも見せてゐるのである。氣の弱いものはあの頸

の太いところやあの眼付きの底光りのしてゐる處を見ただけでも荒肝をとられてしまふであらう。であらうがこちらは柳に風になつてゐれば大丈夫なのである。日本に歸つてからでも今だにその顔付きが印象から去らないのである。が時折かうした變はりものに出くはすことがあるのである。しかし赤鬼や青鬼でもあるまいし、さうその船中で無雜作にこちらをやツつけに来るものでもない。

大體から云ふと此の節は田舎の空氣も大分上海あたりの餘波を受けて悪化して來たところもある。けれども一番油断のならぬのは何と云つても上海である。上海が支那全體で一等危険なところである。田舎に入れば入るほど安全である。たゞ事情がよく判らぬ爲め餘計なことにびく／＼して見たり、こちらの態度に不安の色がつくのである。平氣にしてあたり前にさへして居れば何の事はないのである。現に自分たちピストル一挺持つてゐることもない全然無手であるいてゐてそれで何事もないのである。最近四川の萬縣で三菱の安富君がウッド・オイル桐油の賣揚代金三萬弗の授受をした場面を土地の人に見られそれが爲め哀れ異境に氣の毒な最後を遂げられるに至つたと云ふことがある。かうした大金を見らるゝときには、よほどうまくやつてゐてもやられる心配がある。さ

うすると支那の奥地は矢張り危険で仕方のないのではないかと云ふことになるであらうが實際あまりかねを持つてゐることはどちらにしてもよろしくないのである。

しかし普通支那の奥地へ觀光に出かけてゐるとか歴史地理風俗をしらべに行つて行脚をやつてゐるときなどは出来るだけそこの事情を審かにしてゐることが大切である。事情をよく知らずして深入りすることは戒しめなくてはならぬのである。これ文は念の爲めトンヤンニ東洋人の爲めに一言しておくのである。

九十三 江南鐵橋の行衛

江南は錢塘江を渡りシャオシン紹興から百官に出て寧波に行かうと云ふときには百官寧波間は鐵道がかゝつてゐる。之を滬杭甬鐵道と云つてゐる。ところが上海杭州間の鐵道も之と同じく滬甬鐵道と稱してゐる。もとの鐵道は上海杭州寧波の三大都市の間を聯結する滬杭甬鐵道であつて地圖によつては既にこれが出來たものの如く記入してあるのもある。

事實を踏査してその現状を審しんにして見ると實は上海↓……杭州開口……(紹興)百官↓寧波となつてゐて中間は鐵路を缺いでゐるのである。尤もこの間は運河の發達の著しきものがあり必ずしも鐵路を今急に要すると云ふわけでもないのであらう。地圖に……の點線てんせんで示した部分ぶぶんはたしかに未設線で残つてゐるのである。ところが今から五六年前の事その百官の車站の手前なる曹娥江の江畔には今もすぐ鐵橋てつこうの架せらるゝかと思はしめた枕木まくらぎや鐵材てつざいレールなどが堆く積み上げられてゐたものであるのみならず曹娥江の江心には煉瓦の架脚まで幾本となく既に工事を完了し石材まで之に冠せられてあとは一つに橋梁きょうりやうの架かるのを待つてゐると云つた形に運んでゐたのである。ところが二年たつても三年たつても出來ない。自分があちらに行く度にその橋畔の鐵材などを注意して見てゐるといつしかどちらかへ運び去られて亡くなつてゐる。枕木まくらぎなども一時は腐らかせる爲めに風雨に曝さららしてあるかと思はれたほどであつたがこれも知らぬ間に見えなくなつてゐる。かくて竣工する筈の曹娥江の鐵橋はいづかたへか行つてしまつて全く行衛が不明となつたわけである。

支那では浙江せきしやうソクヤン松江の鐵橋のそれの如く戦時になるとそつくりその鐵橋全體がうまくリ

ベットを外してわきの處へ持ち運ばれて行つたりすることもあるので彼れ等のすることは判らぬ。素とより意表に出ることも時々やるから曹娥江のそれだつて必ずしも疑問を挿さむのも早まり過ぎた事かも知れぬ。けれども一體云ふと怪あやしからぬことである。借款しゃくくわんを起こした外債は責任者も判らずそのかねの行衛も判つきりせぬやうである。かくして幽靈の如く立消えとなつた次第である。然しこゝがいかに支那しならしくてよい所である。自分は寧波ねいぱへ陸から行くときはいつも此の場所に至つて興深く眺めてゐるのである。

かうした仕事で竣工しゆんこうすべき筈の仕事がそのまゝに暗の中に葬り去られてゐる類例は支那の社會相のうちにくらあることか判らぬ。かくの如く暗黒面に葬まうむられてゐることを今閩魔鏡に映す筆法で逐一こゝへさらけ出して來ることは甚だ穩おだかでないと思はるゝかも知れぬが支那社會相、百面相を明にするにはどうしてもかうした片鱗を見せておくの必要があるやうに思ふ。讀者幸に之を諒せられんことを。

十三
海賊奇談

九十四 長江夜泊、巨星の心胸

曾つて支那四百餘州に其の名を轟かせてゐた巨星、王占元翁が湖南湖北の兩湖に蟠居し、威を宇内に示してゐた時分のことである。天下何事か意の如くに成らざらんと豪語してゐた身分でもあつたにも拘らず、其の盛夏の頃、武昌の天地に枕を高うして寝ることが出来ず爲めに毎夜、船を換へ江上に其の居所を晦ましてゐたと云ふ事實がある。思ふにこれは武威赫々たる勢の反面に不斷付け狙つてゐる悪魔の多くして、いつ何時何處から飛び出して來るか分らないと云つた心配が絶えずあつたのである。その暑中の長江夜泊にしても毎晩、錨を下す場所を變へてゐなくては、身に危険の迫る恐れがあると云つた風に實に物凄い場面に起臥してゐたものである。

世の中で榮耀榮華の夢を貪つてゐられる身分は結構のやうではあるが、然かし昇り詰むれば詰むる程「亢龍悔あり」の古語に違はず、何時しか下り阪となるの心配が必ず反面に伴つて來るのである。上海隨一の富豪ハードン哈同は、幾億と云へる大した産を有し、靜安寺路の彼方に哈同路の街

名迄を恣にしてる位であつてそして境内には何十萬坪と云ふ廣い邸宅を有し「愛儂園」の扁額も街上の高壁に豪華に輝き、門前をドライヴする列國の紳士淑女も哈同のこの巨邸ばかりは必ず振り顧つて見ると云ふ位に羨望の的となつてゐるのである。ハードン哈同の主人はもとユダヤ人で夫人は廣東の出である。翁は杭州西湖に別墅を有し「平湖秋月」には蓮窓白壁を湖水に映じ豪莊清趣の別莊風致云はん方なき趣を見せてゐる。最近南軍の兵に侵入されてゐると云ふことであるが此の別莊と云ひ、上海の本宅と云ひ、又其の主人自身の風貌と云ひ、誠に東洋一の王者の概があると云つても過言ではない。

本宅には庭に山あり、池あり、劇場あり、大學あり、中學あり、編輯局あり、印刷局あり、美術館あり、金殿玉樓至れり盡せり、あらゆる文化の華を一園の裏に網羅してゐるの觀があるのである。殊にその夫人の居室から化粧部屋戲臺などに至つては、ベルジュツク産の大の姿見を幾つとなく掲げて居り、夫人は身にあらん限りの寶石をまとひ、首に、胸に、腕に、足にと、此の世の善美を盡した美裝振りを見せてゐるのである。唯思ふ通りにならぬのは寄る年波の額の皺の殖えて行く

ことのみである。

ところで、斯くの如き榮耀榮華の生活に耽り得るハードン哈同夫人でありながら、毎夜其の寢所を同室に定めておくことが出来ず毎日午後の午睡時間でさへも、今日は此方の園亭明日は向ふの山堂にと變へなくてはならぬと云ふ、其の心配の絶えないことはむしろ御氣の毒なほどである。邸内尼寺の參憚に従事せる尼妓は吾々の踏み込んで參觀せるにつゆ心を奪はれることなく、一心不亂に全く木像の置かれてある如き状態で、祈に餘念なきを見た。斯うした世界的富豪生活は、外面から見た榮華の生活と打つて變つて違ひ、王占元が江上夜泊に心配してゐるのと同じ様に、人知れず心を痛めて惡魔の襲來に常に悩まされてゐる次第である。

揚子江上となく、上海の市中となく、支那は上にも云つたやうに何れの地方にも惡魔の横行するもの少なくなき、支那富豪の生活はいつも此の點に最も悩まされてゐるのである。

九十五 瓜分せられたる長江海賊船哀話

長江の中流武穴の街外れに當たり楊柳の蔭に、大きな民船の瓜分せられて衝立つてゐるのを見たことがある。其の外長江筋の江岸には、時折小船の眞二つに切られて立つたまゝ風雨に曝されてゐるのを見ることがある。これ等は皆長江に出没する海賊船の哀れな末路を見せてゐるのである。

本來云ふと長江一帯は概して自然の詩趣に富み、江岸から突出してゐる畑地の一角に釣糸を垂れてゐる漁人の風致があつたり、又大きな四つ手網を仕掛けてゐる子供等が悠々と之を時折引揚げ銀魚の躍れるにニコ／＼せる光景を見たりなどする。又時には大筏が幾つとなく曳船に曳かれて、長江の中流を下つてゐるところなども見たり、或は幾週間に亘つて筏の江岸に繫留せられたまゝ碇泊を恣にしてゐる場面も見たりなどする。又何くれとなくあまたの貨物を満載した船が、夜となく晝となく引切りなしに上下してゐたり、秋の暮に通つて見ると江上は幾十隻の大きな民船に持つて行つて幾十里の間のあの芦の莖を刈取り、山と許りに堆く積み上げ、艤艦八八艦隊でも寄せ來るか

思はれる如き、堂々たるものが數限りなく下つて來る。斯う云つた長江を去來する巨船大筏が茜さす夕陽に照らされてゐる眺望と云つたら、支那大陸でなくては見られない大きなパノラマである。

ところが江上には殆んど警察の手が届いてゐる譯でなし、馬當山や、田家鎮邊りには大砲の仕掛けられてゐることもあるにはあるが、時局の時以外には空虚のまゝである。それ故長江は天下の大水路として出船入り船の頻繁な光景を見せてゐるとは云へ、其の不安の氣分の除かれると云ふのはなく、汽船に積まれた貨物などの外は、多くは無警察の地域を上下してゐる様なものである。海賊團の眼から之を見れば、悉く長江は自分達の餌食として運び込んでゐる様な感じがしてゐることである。さながら馬賊が滿洲の野に、無人の境を行くが如き氣持と同じ様な氣分がしてゐるのである。かくして恐らく長江は海賊の横行の止む時はないであらうと思はるのである。

官憲の手に掛つてその海賊船の挽き切られる場合なんかは、誠に九牛の一毛にも過ぎないのであつて、其の闇から闇へ葬り去られる物は何れ位あるか分らない。此は犠牲者の深き怨がつきまとうてゐるわけであるから、海賊自身が如何なる酷刑に遭ふとも又その船が木つ葉微塵に挽き切られ様

ともいかなる目にあつてもそれで酷刑に過ぐると云ふことは無いのであると考へられてゐるのである。

九十六 海賊の出沒繁き島影

海賊の活躍せる本舞臺は中部支那の沿海から、臺灣海峡、福建廣東の沿岸に掛けての可なり廣い部分である。殊に廣東から海南島に掛け、又はスワトウ汕頭方面の島影には最も多く、海賊の被害を聞くのである。總體海賊の出沒する舞臺は群島、半島の多い形勝の地で、中にはその海賊の根據地となり全然海賊島の觀を呈せるものもあり、それには誰人も迂かり踏み込むことが出来ないものである。

海賊の出沒する南支那一帶の舞臺のうち最も有名な所は、廣東よりマカオ澳門に至る水道にマカオから香港に出る水道又その間の島影、それから香港を出てスワトウ汕頭に至る凸凹の大きい沿岸地帯を中心として、東の方福建の沖合、臺灣海峡を越え、更に舟山列島あたり迄にも擴がつてゐる。

のである。又海を越えて臺灣の西岸新竹の海岸方面にもその被害を頻々聞くのである。又南の方香港を出帆してトンキン湾東京灣の沖合あたりにも之が船影を認めることが多い。詳しくはこれ等は南支一帶の地圖面に依つて説明すれば、最も明瞭になるのであるがその島影並びに岬の出つ張りに依つて圍まれてゐる袋のやうな所がその海賊業に形勝の地であるわけである。

廣東地方には三十萬人からの蛋民と稱せらるゝ水上の民がゐる。が廣東では特殊階級に屬する者であるとなしてゐる。彼等のうち資産を有する者は、時折珠江の江上で海賊の被害を蒙ることがあるのである。海賊の出沒する方面に船を浮べ沖合まで乗り出して見ると、遙か向ふの水平線に船らしいものが目に當たる。進行してゐるでもなし、停止してゐるでもない。いくら双眼鏡で見たり無線電信を掛けて見たりしても何等返事をして來ない。船でこちらへ挨拶をして來ないとは怪しからぬ。双眼鏡を持つてブリツチに立ち、船長の所見を聞きながら二度も三度も見直して見る。どうも怪しい。こちらから船を進め次第に近づいて見ると二本マストに一本の煙突のあることがわかる。船長始め皆どうも、海賊船らしいと云ふことに評定が一決する。と云ふのは船の旗がよく分らず、

又船側の船名もよく見えてゐない。場所が場所柄だけに海賊船として直ぐ断定を下してもよいのである。けれども、國際間の禮儀として今一度又無線電信で以て合圖をして見ようと云ふことになつた。しかしいくら無電をやつて見ても反響がないのである。

自分は海上で斯う云つた機會に度々出會はしてゐる。が、或はさうした船が實は海賊船に非ずして、進路を失ひ困りぬいてゐる石炭船であることもある。見てすぐ想像のつく場合もあるが怪しい海賊船の場合には注意しなくてはならぬ。いくら合圖しても返事のある譯はなく、此方の出様に依つては先方は如何なる態度を取つて向かつて來るか分らないのである。

その船體には二、三千噸から六の物もあり、五千噸に達するものもある。普通は左程大型の物は少ないのである。若し此方が一萬噸内外の船であつて、相當その設備を有してゐる場合は恐るゝことなく、近くまで好意を持つて近か寄ることも出来るのである。さうして雙眼鏡と無線電信で以てよく相手の何物なるかを確かめ、先方が舵でも失ひ困つてゐる船であれば出來得る限り之を助ける方法に出るべきである。時々それが海賊船と見たのはこちらの見誤りで實はノルウエー・スエーデン

の貨物船にして、無電を有せず天候の險惡な爲め太陽の位置がとれない許りに、全然航路の自由を失つてゐると云ふやうなものもある。北緯何度で、東經何度の處に來てゐるか少しも分らない爲めに唯茫然として大海に浪の間に漂うてゐる様な氣の毒な船も時にはあるのである。若し斯くの如き船にして不幸海賊の犠牲となつた場合には、何一つ残らず掠奪されることは云ふまでもなく、船體迄も奪ひ取られて乗組は盡殺さるゝか海中に投げ込まれるかに決つてゐるのである。

海賊出沒繁き島影附近を書となく夜となく小舟で迂路つくことは甚だ危険である殊に濃霧の掛つた四方の方角の立たない時分は最も危険率が多い。こは海賊其の物よりも坐礁の危険が一層多いのである。自分は曾つて一萬噸のコレア丸で香港行の途中、船長栗原憲三君や、石橋機關長等と舍弟同伴、殆んど他に一人の乗客なく、卓を圍み海賊談に時を移したことがあつた。海賊の出沒繁き海上を乗組と海賊談で持ち切りに時を移すと云ふこと位興味深いことはない。言々句々身に浸み渡る感じがしてならぬ。唯吾が船の噸數が一萬噸を越えてゐるが爲めに、よそ事の如き感じがしてゐるけれども、若しこれが二三千噸の船であつたとしたならばすぐ現實にやつて來るかも知れぬと思

ふと人ごとの様な気持ちはしないのである。

九十七 航海中の船客海賊團と化す

南方支那では船客の姿で乗り込んで来た數多の支那人がその船の錨を上げて沖合に出た後、俄然態度を一變し、兇器ピストルを手にし、引金に指を掛けて船長を襲ふなど云ふことはこれ迄幾度となくあつたことである。それ故廣東方面を往復する汽船にあつては、英船、佛山號を始め、各船船長室のドアの前にはピストルで身を固めた數人の衛兵の守備してゐるのお定りにゐる。衛兵は胴に幾十發の彈丸を用意したバンドを纏ひ、輕装せる筋骨逞しい體格の持主である。

ひとり船長室の前許りでなく、一二等の方もさうである。その多く海賊に變すると云ふ客は三等客である關係上、三等と一二等の境界線にも警備の衛兵が配つてあるのである。乗客が不幸にして海賊團の變装したものである場合には、出帆後は殆んど之に對する方法は取れないのである。彼れ等はその専門的稜腕を發揮して、拔かりなく機敏な行動を取り、第一着に無線電信を切つて了ふさ

うして羅針盤を取扱ふに慣れた者が上つて来て先づブリツチを占領して了ふ。或は又機關のことに巧みな者はエンジン・ルームを占領する。されば船長始め高級乗組員にしてもしも海賊の爲め擧殺せられたとした場合には、殆んど船は勝手放題にせられ掠奪の運命から逃れる譯には行かないのである。

而かも之が支那の領海以外の處で起つた事件であれば、殆んど國際的にも手の付け様がなくなる。列國では常に軍艦を派遣して置いて、之を見張るのを仕事としてゐるのである。若しそれ銃器彈藥等を登載せるあたり前の船にして海賊船から何等かの方法で探知された場合としたならば全く彼等の餌食となつてしまふ譯である。廣東を中心として南支那の沖合一帯は、東洋に於ける海賊の中心巢窟園内として常に列國領事邊りの問題となしてゐるところであるが、如何にせん支那側には之に對して徹底的手段を講ずることが出來ず、列國側でもたゞおきまり文句の抗議を重ねて見たり、經濟的の打撃を受けて憤慨はして見るものゝ、未だに之が明快なる根絶的解決法を見る程にはなつてゐないのである。

若しそれ船の乗組経験でも有する老練な者が、一度成り下つてその海賊の仲間に入つたとしたならば、船の事情はお手の物であるから益々その地方の危険を増し凄味を加へて來るのである。年々海賊の被害は統計を見るまでもなく事實は決して減つてはゐないのである。それ故南支地方の沿岸の航海は大事をとつて考へると大船を用ひるに越したことはないのである。

九十八 航路に待構ふる廣東船

廣東の沖で海賊に出くはしたときは頗る留意すべきことがある。今南支大海を航行中攻撃を受けた場合に就いて述べて見ると、航路遙かに彼方の波間に當たり大抵二隻の小船が相並んで姿を見せるのである。其の時こちらで早く氣が付き方向を轉すれば好いが、それに氣がつかず若しその同じコースを取つて進んでゐる場合にはちやんと待ち構へてゐる二隻の船に弄ばるのである。向かふでは船と船との間に大きな麻のロープ網を仕掛けて互によく聯絡を取り同一の行動に出てゐるのである。

二杯の海賊船はいつもの手でその經驗に富んだ方法で以て網の中央をこちらの船體の前に邪魔になる様な位置を見定めその位置で待つてゐる。こちらが進む速力によつて忽ち二杯の船はこちらの左舷と右舷の兩側へびたりとくつ付くのである。するとかねて用意されてゐる頑丈な鳶口の長い竹竿を以てこちらの船窓とか手すりとか引つ掛け得べき所を見出し側壁に沿うて恐るゝ氣色もなく上り來ようとするのである。

船では一大事と許り兼ねて仕度のしてある手揚げの水を上からぶつ掛けるとか、或はホースで海水を注ぎかけるとか丸で火事場同様の騒ぎで攀ち登らんとする海賊を水攻めに遭はせるのである。同時に無電を使つて「海賊來了！」の警報を發し、極力之が防止の手配に努めるのである。併し如何にホースの水をかけても物ともせずデッキや船室に侵入して來る。船室に這入り込まれた以上は、最早や方法はなく、例に依つて無線を占領せられ、船長はピストルの引金の前に運命がきめらるゝのである。

斯う云つた物凄い場面はマカオ澳門から廣東に向ふあの黄色の海上島影のあたりに最も多く見ら

るものである。澳門はポルトガル領で、その財政は賭博場の税金に依つて大體支へられてゐると云ふ位に、その賭博の遊びは晝夜盛大を極めてゐる所である。現實に一攫千金の喜を湛へた客が懷を肥やして、マカオの賭博場から出で夜船に乗り、北航珠江を廻り歸路に就くのである。するとそれと見て取つて豫め航路に待ち構へてゐた海賊は、紅緑の舷燈を目標に、時こそ來たれと許りやつて來るのである。夜半のこととて、眼を付けられた掠鳥は大抵やられてしまふのである。折角の千金も一瞬間にして奪ひ去られてしまふのである。のみならず身體は水中へ投ぜられるとの事である。晝間この方面の海圖を案じ、珠江を廻つてゐると水上は見渡す限り味噌汁の如く黄色に色彩られ左右に展開して眺めらるゝ幾多の曲線美なす鳥影は誠に南支獨特の景趣を見せ、珠江の左岸に見る荔枝の森影も優しく、風致を添へてゐるのであるけれども、心一度海賊襲來のことを思ひ出すときは全く興がさめて了ふのである。

九十九 廣東汽船に見る鐵柵

船で海上を走る場合には、乗組となく乗客となく、すべてその貴賤を問はず又國の内外を問はず所謂一運托生の運命を覺悟して航行してゐるのである。全く吳越同舟の形である。ところが廣東方面の汽船に乗つて見ると、香港廣東の聯絡船に限らず、すべてこの地方の船内は此れ等客室を界に物凄き獄屋を連想せしむる嚴めしい鐵柵が廻らされてゐるのを見る。初めから泥棒罪人と見て斯くの如き牢屋式の鐵柵を廻らしてゐると云ふことは、如何にも乗客を泥棒扱ひし、人道を無視した譯にも考へらるゝと云へば云へるけれども、かゝる理窟は他國の港内でのみ云はれるべきことであつて、廣東の沿岸では上品なことは云つてゐられない。こゝは又特別の所なのである。すべて一から十まで深刻味を以て考へ常に警戒をしてゐなければ自分の身が危いと云ふ武装氣分で居なければならぬ所なのである。

一二等の船客は紳士淑女で性善なるものであるとして、之を寛大に取扱ひ、三等客のみは全部残らず之を泥棒又は前科者と云つた氣分で取扱つてゐるのである。それ故三等客の追込みの部屋から通路を傳つて、一二等の方に來ようとするパセージはもとよりのこと、その船の幅が五間

あれば五間、六間あれば六間残らず天井まで通して、頑丈な鐵柵を以て之を隔離してゐるのである。さうして其の鐵柵の隙間から此等の方を覗き込んで見ると、意外にも其の乗客は必ずしも全部が前科者と云つたやうな顔付はしてゐない。存外客だねはよくて呑ん氣に見え風流の手合も少なくないのである。

時には夏の夜、部屋に射し込む月を友として込み合へる乗客のすべてが胡弓の音に恍惚として聞きとれてゐる場面も見えたり又一方には明笛の鮮かな音なども聞えてゐたりして、懐かしく眺めらるゝのである。之を一二等客の紳士然ときどつてゐる者に比べて見ると、どうしても劣つてゐるは見えない。時折自分は鐵門を破つて三等の方へ行つて見たいやうな氣持ちのしたことは一度ならずあつたけれども、斯うした鐵柵がこゝに設けられなくては全體としての一二等客が枕を高くして休むことが出来ないと云はれてゐるのである。

一等の船室は二重の鍵を有するドアが設備されてゐるとか又二三室毎には之が警備の船員が銃劍を帯びて泥棒を見張つて呉れてゐるとかされてゐる。その爲め船内は實に殺風景な凄味を漲らせ

てゐて、誠に廣東行きくわんとうんぎの船と云へば監獄刑務所かんごくけいむじょを船内に移し來たつたのではないかと云つた感じを起させてゐるのである。恐らく豺狼を船に積んでもこれ程迄の不愉快な感じを起すことはあるまいと思はるゝ位である。

百和寇餘談

日本では和寇の研究に後藤嘯堂君がある。和寇の歴史に就いては微に入り細に入り其の詳細を極めて居られる。こゝに海賊の紹介をなすに當つては自分も一言和寇と海賊に關する挿話を試みておきたいと思ふ。

歴史の傳ふところに依れば、足利の時代に海外貿易がかなり進展し、朝鮮方面の取引は對馬の宗家に、又明の大陸方面は長州の大内家に管掌せしめられ、關西地方の商品は一面に泉州堺を中心に盛んに海外と取引が出来て居た。従つて大陸方面の地理事情は、當時その取引の範圍の廣くなるにつれて、比較的よく民間にも知られ、支那の新しい言葉なども日本へよほど傳はつて來る様な氣

運になつてゐたのである。

ところが足利の世は財政が窮乏し京都も著しく淋れ、衰微の極點に達し、畏れ多くも宮室におかれてもこれまでにないお氣の毒な状態に陥られ、宮中で各般の儀式を行はれるにも其の費用の支出に困られると云ふくらゐで外へ御出ましにならるゝにも乗り物を用ひらるゝことさへ出來ず、お拾ひで出掛けてゐらしたと云つた状態であつたのである。そこへ以て行つて應仁の亂後飢饉に托して各地方へ流浪し都を落ちて行く者が少なからずあつた。しかし、地方でもおいそれと之を全部受入れても呉れないのである。そこで思ひ當たるのは大陸である。その支那方面に進展して行かうとする者は相當あつた様子である。殊に九州の大友菊池少貳の軍が大内氏から打破られて後、其の部下の亡命して對岸へ乗り出し、海賊の仲間身身を投じたものが相當あるらしかつた。中にはさう云つた手合が或は全くの丸裸で舟を漕ぎ、酷いなりをしてゐた者もある。或は又中には甲を被ぶり旗を翻しそして九州の沿海から支那朝鮮の沿岸を盛んに荒して廻つたものもあつた様子である。そしてあちらの不平分子などの間に交りかなりやつたものである。するとあちらでは次第にその暴行が喧

しい問題となりその爲めに幕府は松浦家に命じて之を何とか抑止し鎮撫せしめると云ふ様な方法を講ぜしめようとしたが、大勢は如何んともなし難かつた。そして支那の海岸殊に中部以南の津々浦々一帯にかけてこれまでにない掠奪をなし荒して廻つた。そのやり方が悲惨の極に達したので大分あちらでは防禦法に悩まされてゐたのであつた。

今日海を渡つて浙江寧波あたりからあの地方へ行つて見るとその海岸要害の地には石垣を築き土壁を作りそして和寇に備へたと云はれてゐる遺跡が少なからず見出される。これは、土民の説明を待つまでもなく、以て如何に當時和寇の害が猖獗を極め地方民を苦しめてゐたかが分るのである。尤も種々の情報に依つて當時の掠奪振りを察するに、中には日本人でないものが和寇と稱し、日本の旗を押立て支那の本物の海賊團が、臺灣海峡から南支一帯を荒し廻つてゐた形跡もかなり澤山ある。或は又日本の和寇の中に混つて、共同的活躍を演じようとするなど種々策應するものがあつたらしく見える。

和寇そのものの活躍は日本の外部に進展する大切なる積極主義の發揚で固より痛快味を感じしめ

るものであるに違ひはないのであるが、其の結果は著しい悪影響を彼の沿岸地方人民に與へたのである。後、徳川の初期になつて山田長政がシヤムに渡り、香ばしき功績をシヤムの王政の上に残した如き龜鑑は足利時代の和寇の活躍の中に見出し得なかつたところで、何としても遺憾なことと思はれるのである。

友人藤岡維平君は文部省國定教科書中から和寇の文字を削りすべて日本民族の西方進展の現象として之を取扱ひ吾人の祖先に出稼ぎ泥棒のあつたことを教ゆるは百弊あつて一利なしとなす説を敬聽したることがある。一言附記してこゝに紹介しておく次第である。

百一 大湖を遊戈せる海賊發動汽船

上海の田舎に大きな湖水がある。非常に大きな湖水で日本で云へば琵琶湖にも相當する者である。土民は之をターフ大湖と云つてゐる。洞庭湖上に君山と云へる島山が出来た爲めに、此の大湖が一夜のうちに出来たなどとたわいもない傳説を生んでゐる湖水であるが、こゝは風景が明媚で、水

は清く、眞帆片帆の靜かに湖上を去來してゐるところは繪の様である。

蘇州から船を出して西の方ニシン宜興に向かふ者は、此の大湖を横切るのを捷徑としてゐる。

近來は著しく大湖の水運輸が開け、物資の集散は大湖を中心に大變活潑になつて來た。従つて舊來の民船に依れる貨物は益々新しい方法で以て運ばれる様になり最近には發動汽船等の曳船をも盛に見るに至つたところが一方に江南各地に立籠つてゐる泥棒の方法も益々巧みになり、餘程悪化し來たり、此の地方の人氣は俄然悪くなつて來た附近の運河を我れわれが下らうとしても吾人を目して實は兵隊であるに偽はり兵隊でない振りをしてゐるのではないか。それとも便衣隊ではないかなどと云つて、乗船を拒まうとする様なこともある。既にかく行人を疑ふと云ふことは外部からの悪影響の爲めである。夜などは迂かりしてゐると危険を感じざるを得ないのである。

一方泥棒を働く者は自動車を驅り、ピストルを用意すると云つたジゴマ式の活動がだん／＼と多くなつて來る。飛行艇を江上に浮べて物質の輸送を計つてゐる錢塘江上の近來の活躍は之は特別であるが、大湖方面にも段々新しい運輸機關が採用されて來たのである。此の地方の海賊は民船を棄

て、發動汽船を用ひ、大規模に仕事をしようなどと云ふ者も現はれ來たりして一層良民は脅威を感じて來たのである。

又月夜墓陵の前の石人石馬をかすめ去るものある話を耳にすることもあるがこは舊來の民船を使用してゐるのであらうが、之を引つぱり廻して足跡を眩ますと云ふには發動汽船に如くはない。ともかく何かにつけて新しい方法の採用せられて來たと云ふことは、益々大湖方面の人氣を悪くする所以であると考へられる。

要するに支那沿海地方には南となく、北となく、湖水となく、江上となく、海賊の被害が頻々として止まない。恐らく之が弊害は列國の軍艦を所々に見張らせておく位のことでは押への出来るものではない。一方を追つ掛けてゐれば他方が留守になると云ふ譯であつて、之が鎗壓に苦心してゐるものゝ方よりも、暴行を働いて行く者の方が先きへ先きへと廻つて進んで行くのである。支那から臺灣海峡を通りシンガポールあたりへ行く航路の如きも當分水上盜賊村の航路を切り抜けて行くやうな感がすると云つてもよろしい位である。然し之を氣にしてゐれば際限のない話である。唯そ

れに對する用意だけをしてそしてあとは大體あんまり神經質にならずに呑ん氣に活躍することである。あまりに氣にしてゐては何事も出來ず活動をやむるの外なくなるのである。

十四
青
龍
刀

百二 青龍刀の輕業

支那人の思想では青龍刀の傳説、物語、其他青龍刀の輕業と云つたやうな事が、非常に興味深く考へられてゐる。元來支那の刀は千態萬様で、佩文韻府に見えてゐる刀類の中にも青龍刀、百辟刀、日本刀、斷邪刀、千牛刀、神術刀、七聖刀、五色刀、等といろく見えてゐるが、今日では青龍刀がもつとも興味を咬つてゐる。芝居の舞臺にも武劇に髯武者の銅羅の響に調子を合はせ、頭上長き羽毛を搖がせ、青龍刀を大車輪に振り廻はして出て來る場面など、最も觀客の視線を集めてゐるのである。されば路傍の輕業の上にも環堵の見物人を前に青龍刀の目さましい操り方をして口にほとばしる臺詞も勇ましく、大衆をして銅錢の十文も、それく思はず投げ出させると云つた妙技を演ずるのである。

元よりこは平民的歡樂の巷としての天橋路邊りで年が年中、常に見らるゝ輕業であるが其の邊りでは尙七寸の曲つた刀子を呑み込んで見せたり、水藝をやつて巧に水を取扱つて見せ、肩からでも、

腕からでも注ぎ出し又その藝人仲間の腰からでも股の間からでも、自由なもので殆んど離れわざ的に水を噴出せしめてゐるのである。其處ら近所にゐれば水をぶつかけられるがその場面にて見ると不思議な藝當を演じてゐるとして驚くの外ないのである。或は直径の八寸もあらうと云ふ大きな竹の長さ十間もあらうと云ふのを直立させて何事かしやべつてゐる。頂きには紅の御旗を垂らし之に筆太の金文字が入れられてゐる。遠方の観客も何事が始まるかと之に引かれて足が此方に向いて来る。見物人の集まつて来るのを待ち二三の輕業師が、相互の肩から腕へ、腕から肩へと何の苦もなくその大きな竹を直立させた儘、轉がし移して見せるのである。其の間何等手で以て之を支へたりするのではなく、全く竹の根元を順次に移動させて之を次の人間に渡すのである。その間非常な力を要することとて一生懸命である。それ故にその藝當に入る時は嚴寒の頃でも全身に汗してゐるのである。

かう云つた民衆娛樂の中心點に、青龍刀の輕業と云ふものが他の催しからひとときは目立つて賑ひ場内では最も人氣を博してゐるのである。其の傍には又紅緑、金銀の五彩に色どられた青龍刀の玩

具を並べて賣つてゐる露店がある。子供にねだられ柄の長い青龍刀を一本買つてゐる親もあれば、赤い總房の付いた派手やかなのを求めてゐる子供もゐる。何れもこれ等の玩具は惡魔拂ひの具といふ意味を兼ねたものであるけれども、芝居や輕業のときの青龍刀を聯想して喜んでお土産に買ひ求めてゐるものと見える。

自分のあたまには青龍刀に就いて色々のことが思出される。例へば惡魔拂ひのときに發する爆竹の光景であるとか、或は暗夜山賊の村を過ぎ行くときの物凄しい場面であるとか、又青龍刀を携へた役人の望める斷頭臺の場面であるとか、種々の光景が思ひ浮べられるのであるが、併し自分は北京天橋路の輕業の場面に見る青龍刀が一番罪が無く好いと思ふ。子供達は又その玩具に依り芝居の眞似をして喜ぶと云ふ工合であつて青龍刀そのものにも一種の面白味が聯想されてゐるのである。

百三 青龍刀の藝術化

兎角く悪い方面の聯想にのみ相場をきめられてゐる支那の青龍刀も、近來かなりその民衆化せら

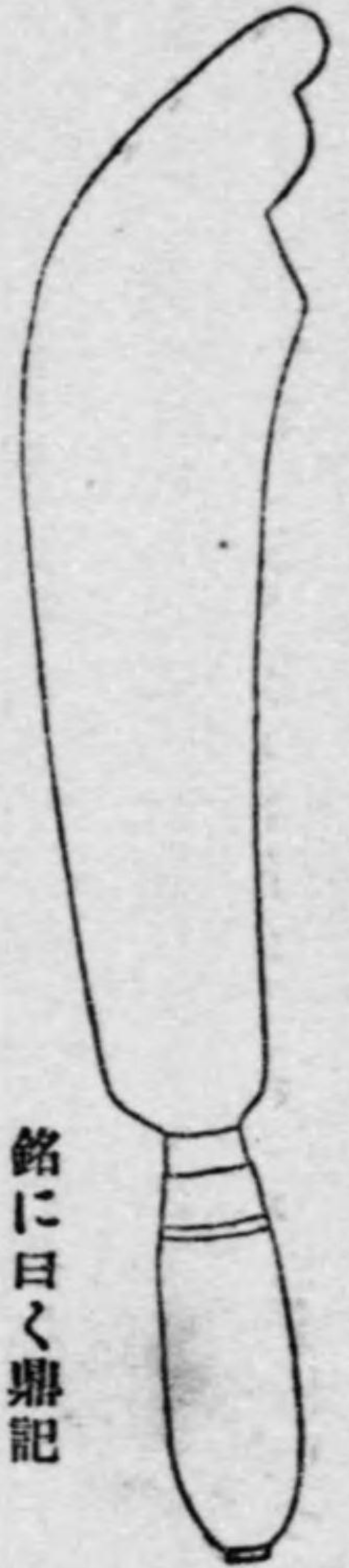
れてゐるところを利用して色々とだん／＼美しく立派に飾られ又は上品な君子の弄ぶものゝ方へも採り入れられて来る傾向が生じたやうである。と云ふのは例へば

- 一、芝居の武劇に用ひらるゝ舞臺用の青龍刀
- 二、上流家庭の兒童の玩具として使用せらるゝ彩色された青龍刀
- 三、宮廟の神前儀仗用に供せられたる嚴かめしい青龍刀
- 四、書齋の卓上用に供せられたる優美溫雅なる青龍刀
- 五、工藝美術方面に應用せられたる圖案的青龍刀

かう云つた方面のものを考へて見るとその殘忍性を聯想せしむる事は全くなり一つの美しい藝術眼を以つて見ることになるのである。或は西洋式の食卓に見るナイフのうちにもその形さながら東洋の青龍刀の系統を引いてゐるのではないかと思はるゝ恰好に出來たものもある。これは西洋の武器の歴史をよく調べた上でなくては斷定は出來ぬことであるが若し支那の形から思ひ付いたものとするとかく食事用のものまでにも現はれてゐることが判るのである。自分が坐右において朝夕

使用してゐる紙切り刀子のうちにも左の如きものがある。

自家用
紙切刀子
青龍刀型



銘に曰く鼎記

これは長さは約九寸五分片刃、黒漆の把手を有してゐるものであつて全體として曲線美に富み何となく

豊かな感じを呼び起こさせるものである。其武劇に用ひられたるものや玩具用のものには金銀、五彩に美飾されたものや又嚴かめしく總房の飾りのついたものなどもあつたりして千變萬化であるが要するに何れにしてもその青龍刀が美化せられ藝術化せられて一般民衆の趣味的方面にひろく應用せられて來てゐることだけは事實である。最も深刻味を帯びてゐた刑刀がかくの如き意味に變化して來たと云ふことは支那文化史の上に面白い現象であると思ふのである。

百四 青龍刀を聯想する青龍橋の地名

青龍と云ひ蒼龍と云ふ、昔し果たして今日嶺南廣州あたりから廣西にかけて見出さるゝやうな蛇

一種天龍の實物を目撃して之に命名したものであるか。それとも單に想像したものに命名をしたものであるであらうかその邊はよく判らぬが青龍刀そのものゝ形からするとその名稱の如きはさう云つた不可思議な鬼神を切つたとしても云ふやうな傳説があつたのではあるまいか。宛かも草なぎの劍と云つたやうな類の命名法からこれが來てゐるものと推測は出來ぬであらうか。して見るともかく青龍そのものとの青龍刀とはたしかに關係のあるものであらうと考へられるのである。

ところで自分は北支那をあるいてパータリン八達嶺であるとか又張家口大同あたりに出かくるときはいつでもかの有名なチンルンチヤウ青龍橋と云ふところを過ぎるのである。時にはこゝまで驢馬を進めてこゝから驢に跨がり八達嶺へ駱駝隊と前になり後ろになりつゝ行つたこともある。この青龍橋あたり一帯の景色は實に大きい。殊に萬里の長城がその邊の山々を峯から谷へ、谷から峯へと蜿々長蛇の如く走つてゐるところは實に大きいのである。實際あの大きい長城が山の峯から溪谷の方へ急轉直下につてゐる。その恰好と云つたら自分はいつも之を青龍が谷間の水を飲みに降りてゐる形にもなぞらへたらばと思つて見てゐるのである。

實に物凄いやうな壯絶なやうな痛快味をこの青龍橋の長城を見る度毎に思ひ出すのである。殊にこの邊りに限つて長城の數も多い。幾重となくチウユンクワン居庸關あたりから始まつてあまたあちこちに蜿々走つてゐるので益々その感を深くする次第である。青龍橋と云ふ地名は實によく付けられた稱呼であつてさながら南支浙江東錢湖のそばの象鼻山と云ふ名稱がいかにも臥象の鼻をつくりであつてその名稱がその恰好に的中してゐるのを見出したとき愉快に思つたことがあるが北支に於ける此の山境の地名は實際又よく附けられてゐると思はるゝのである。讀者にしてこゝを遊歴せられたかたは恐らく自分と感と同じうせらるゝことと思ふ。これは青龍刀そのものと直接の關係はない事であるがその名稱の類似點の方から氣づいたまゝを挿話として記しておく次第である。

百五 體刑の廢すべからざる支那の社會相

支那を旅行した經驗のあられる諸君は、上海の租界に印度人が棒を持つて辻々に交通整理を行ひ、鐵路の要所々々に立つて行人の秩序を維持する道具に使はれてゐることを、最も印象深く見て來ら

れたことであらう。天津に於ても其の河岸近き工場を訪れて、其の職工達の就業振りを見てみると側に立つ監督は四尺の大きな棒を持つて、常に之に臨んでゐる。又杭州の驛前の廣場には、汽車から降りた旅客を取り巻く力車の群集裡に、巡警が四尺の棒を持つて之に臨み、客に對して亂暴な仕振りでも見せた車夫にはいきなり棒を振り上げ車臺も壊れん許りに之を亂打するのである。支那は見様に依つては棒で高つ飛車に臨まなければ納まらない國と見える。併し唯單に棒は脅かしの爲めの飾りではなくて、時には之で實際に決め付ける場合もあるのである。

昔しから支那の刑罰には手錠足枷の刑があつて、數人が一つの板に首を並べて突つ込み、すべていつも一致した行動で一人の看守に守られ幾日間か眼抜きを歩かされるものがある。無論一人々々に鎖が付いてゐて、飛び出すことは全く出来ない様な仕掛になつてゐる。又獄屋には足枷に兩足を突つ込んだきり身體を彎曲させて日向ぼつこをしてゐる様な罪人も數多見受ける。其の他街中で泥棒をやつた男が警察門内の屋外で六尺の板の上に尻を捲つたまゝ打つ伏せに寝かされ、いかめしく身構へして立つてゐる獄吏の爲めに二尺餘の麻の鞭で以て威勢よくびしやり／＼打たれてゐる

場面を見たこともある。所謂笞杖の刑であつて、其の數は二十、三十、五十、と幾段にも分れてゐるらしい。さうしてその獄吏は罪人のそばで約一尺許りの所へ位置を占め、尻の左右のふくらみを目當てに、殆んど睨みを遠へず幾度も同じところに力を入れ之を打つのである。其の一打ち毎に罪人は大きな泣聲を張り立てゝわん／＼と泣くのである。如何にも痛さを正直に物語つた泣き方で、可愛相にも見えるのである。役人は見るでない。見てゐてはいけないと我々を制し一應は注意をすれば、可憐な物好半分研究半分の自分は、容易に現場を離れたくないのでしまひまで見てゐたのである。聞く所に依れば、その鞭は之を受ける前に藥の廻はし加減で、相當手加減がされると云ふことである。

すべて以上述ぶる如き體刑は、まだ支那としては軽い方のものである。メンツ面子を重んぜさせると云ふことの方が文明式ではあるがこれらの眼に一丁字なき手合に對しては、身體に痛みを感じしむるの體刑が何よりである。そしてあとは何とでもして金錢を以て罪を賄はしむる方法があるのである。しかし重罪の犯人になれば、體刑の終極のものとして近來は銃殺の方法がある。これでは

ければ、青龍刀を以て断頭臺で以て一と思ひに首を落すのである。日本では近來種々の文明式の首の落し方が應用せられ、殆んど當人を苦しめない様な方法を行つてゐるのであるが、支那では本來の目的が衆人に見せて、之を天下に公示し、天下の行人をして見せしめとなすことを眼目となせる關係上、出来る限り當人を衆人の面前で苦しめ、又その苦しい状態の如何にもよく見るに忍びないと思つた氣持を人に與へる様な手段を取つてゐるのである。或はこの方が刑罰の本當の精神に適つてゐると評すべきかも知れない。

さながらこれは事柄はちがふが葬式の場合に泣き女を雇ひ來たり孝心を誇張したり或は又喧嘩をやる場合に茶館で落ち合つて、喧嘩をなると多敷に見せ様とするのと同じ心理から出てゐるのである。それ故大罪を犯せる犯人に對しては、出來得る限り目立つ様な物凄い青龍刀を振り上げて、慘酷な場面を成るべくよく判る様に演じ終らうと云ふのが、支那體刑の最も本領とするところの様に思はれるのである。

百六 南支海南島に見る酷刑

支那本陸を離れて、南トンキン湾東京灣の入口に介在してゐるハイナンタウ海南島は、風俗、習慣、人種、各種の點に於て大陸と變つてゐる所が頗る多い。支那歴史上匡山の戰で有名なる此の海南島には、たまには日本人の役人として、或は出稼人として渡つてゐる者もあるが今これ等の人と土地の奇習に就いて語り合つたところによつて見ると、時には頗る注目し値する挿話も少くないのである。

最近海南島内には、官憲の壓迫に反抗して、共產黨の殘員が島内各處にひそみ隠れてゐて、資産家と云ふ資産家をあさり殆んど其の主人を殺害し、山寨或は部落に連れ込み、闇から闇へと葬り去つてゐるのである。最近廣東李濟派の官憲が之を嗅ぎ付け來り、片つ端からこれ等共產黨系に對する彈壓的刑罰を行つたと云ふことである。

其の方法の中最も奇抜なものは、之をこゝに述ぶることを憚るが、普通の銃殺酷刑を行つたあと

で其の死體をすぐ其の儘葬らうともせず、右の肩或は左の肩に穴を明け、鎖骨のところを綱を結び付けて之を樹上に引つ掛るやうなことをするのである。或は死刑後道路におかれた遺骸の手足に持つて行つて五寸釘を打ち込む等徹底以上に徹底した残忍に堪へない方法を探つてゐるのである。又其の女の犯人に關する酷刑と云つたら、殆んど天下に公表の出来ない方法を徹底的に執るのであつて人間世界の仕わざとはとても考へられないところまで行くのである。こはその方面に集められた寫眞に依つて全部残らず知ることが出来るのであるがこゝには詳述することを遠慮しておきたい。

其の外犯人の死體の取扱ひかたには尙その臍とかをあげて五臟腑を全部さらけ出すなど、全く地獄の悪鬼の世界にでも行かなくては見られないやうなことをやつて見せつけてゐるのである。實にどうも變れば變つた所もあるのである。この位の程度のこととは態々海南島まで出て行かなくとも、近いところで濟南事件に於ても殆んど似た程度の場面が演ぜられてゐたのである。吾人はその餘りに悲惨を極めた光景であるところからこゝに一々詳述するの勇氣を持たない譯であるから此の程度で御免を限り讀者の丁解を得ておきたいと思ふ。

百七 死刑場の景色

支那の死刑場と云へば、監獄の附近に在つたり、街はづれの淋しい場所にあつたり、柳の二三本茂つてゐる一寸した所がそれと定められたりするものが普通である。けれども、併し都會地では東京で云つて見れば銀座通の眼抜き場所と云つた所をば臨時の死刑場と定める。そして成るべくは天下の者をして其の光景を實地に目撃せしめ、一般の見せしめしようとする云ふのが眼目となつてゐる。されば北京では最も多く民衆の蟻集する天龍橋邊りがその死刑場選ばれてゐるのである。天津邊りでは租界地の目抜きの電車通りが人の多く去來する所であるからそこが選ばれる。或は厦門に於ても廣東に於ても或は又上海の龍華に於ても同様で、すべて人目の多い場所が處刑場と定められるのである。

死刑を行ふには直ちに犯人を死刑臺に乗せる場合もあるがそれよりも犯人を捕縛した姿で何日間か眼抜きの大通りに曳すり廻し、衆人の見せしめに供し或は又一枚の長い板に穴を穿け三人五人と

首を突つ込ませて鍵で止め、珠數つなぎの恰好で街路を歩かせてる場合もあるが然し結局はこれも斷頭臺に登らせるところまで行くのである。

尙もつと慘酷な處刑法になると、絞首臺を四本柱の高臺に作りその上邊の板に頸を引つ掛けたまゝ宙に胴體を吊し、手足も其の儘ぶらりと垂らせるのである。身内の者がそばへ近づいて行つても、饅頭一つ喰べさせてやる譯に行かない。唯饑を死にするのを待つのみである。たまには役人の袖の下を使つて、多少唇を濕ほしてやる位のこととは出来ないこともないと云ふことであるが、之も容易に許されないのである。然るに人間の食ひ氣と云ふものは死の間際迄去らないものと見えてその罪人は遂には無理に自分の齒で以つて、自分の首を載せてある首枷板を嚙じらうと努めるのである。けれ共之も數日の後には力盡きて、如何んとも出来なくなつて日増しに餓死に近づくのである。要するに當人は饑餓の状態に陥り、全身の體量を頸の骨一つで支へるわけに行かずとても溜らぬ。かくして遂に死滅に至らしむると云ふやりかたなのである。

その重罪犯人にして普通捕縛の儘大道で首を落とされる者は、大抵先づ大地に跪坐せしむるので

ある。さうして處刑場の役人が傍に来たつて、大きな青龍刀を振りあげ一と思ひに切つて落とすのである。首は其の時の調子で二三間先に飛ぶこともある。暫く眼をばちくりさせてゐたり、顔面神經をびち／＼動かせてゐたりなどしてゐるが顔色はすぐその場で悪くなると云ふ譯ではない。けれども、既にその人の首は胴體から離れてゐるのである。頸の大動脈はほどばしり鮮血淋漓として鮮かな深紅色を見せてゐる。七重八重と堵列を作つて見てゐる群集の中からは頑是なき子供達が大きな饅頭を抱へて側に近づき、制するのを犯して饅頭に血を付け、さもうまさうにむしや／＼頬張つてやつてゐる所が見られる。これは支那人固有の迷信から來てゐるものと云はれてゐる。聽て首取りが釣瓶大の籠を持つてやつて來る。そしてその生首を之に入れて運んで行く。これは恰度柳行李の材料のやうなもので出來た底深き圓筒狀の編み物であつて、砲彈型をなしてゐる。その死刑に處せらるゝものは時として其の罪狀の如何に依り、廣く之を天下に見せしめにするの必要のあるものは、その首を手分けして、それ／＼目抜ききの四辻界限へ持つて行き電柱とか高壓線とかの高所に之をぶら下げ、或は鼻首となして風雨にさらしておくのである。

今から十數年前のことであつた。山東省方面から北支那一帯にかけ國禁を犯して、青錢即ち穴あき錢を盛んに持ち出すことが流行したものであつた。當時或は植木賣りに化けて植木鉢の底へ青錢を詰め込んだり、瘠せ型の男が大男のがわくした寛衣を纏ひ、兩肩に持つて行つて紐を通した數多の穴錢を引掛け、悠悠落ち着き拂つて租界内へと密送し來つたことがあつた。又かれらが租界内へ引張つて來る。荷車に二重底の仕掛けをなし此れに隠して持ち出すなどと云つた風に盛んにその犯罪が行はれたものであつた。ところが當時いくら厳しく云つても天津、青島に之を集めてこゝに工場を設け大型のナマコに之を鑄潰しドン／＼國外へ運び出したものであつた。之に對して交通部方面ではかなり厳しく見張りを出してゐたのであつた。けれども之が中々大仕掛に運び出されその爲め北支那一帯の穴錢は急に激減し、田舎の金融取引状態も將に變調を來たさん程迄に至つたのである。事重大なる結果を生ずるだけ夫れだけ、當局でも之に對し嚴罰を公布し處刑の方も峻嚴を極めたのであつた。そして穴錢密輸送の犯人と云ふ犯人は悉く拉致して青龍刀を見舞はれ其の首は、天津眼抜きの大街の電柱に高くぶら下げられたものであつた。當時支那は民國になつてから間もな

い時であつた爲め辯髮の連中も尙あちらこちらに多く梟首を路傍の電柱に吊すには最も都合よく出てゐたのである。

支那人は死刑くらゐは何とも思つてゐないやうで、その死に臨んでの心理状態は、吾人の特に異様に感ずる點である。其の將に首を落とされんとする瞬間が來ても、英雄豪傑の襟度とでも、云はんか、何ん等死を恐るゝの氣の見えないのみならず、從容死に就かんことを欲するものゝ如く、つまりさながら歸るが如き氣分である様に見えてゐたのである。いざとなればそれと諦らめて大悟徹底し唯天命を待つと云つた大きな悟つた心にもなるものと見える。死を前に控へて一度も覺悟したことの無い自分達には、其の間の心理状態を解することは出來ないのである。

尙支那では巨頭に死の宣告を與へるといふとき、一方その巨頭の首を落とすと云ふ刹那、巨頭と最も顔の似た者を求め來たり、其の本物を拉致し敵の牙城に死刑に處するは固よりのこと其の似顔の方の首も亦之を大街の公園其他目抜き場所で梟首となして高く懸し、そして世の見せしめに供すると云ふ様なことが行はれるのである。その顔の似た人間に生れたものこそ誠によい迷惑な

話である。これは近年杭州や南京に於て、孫傳芳が杭州の自稱督軍夏超の首實檢をやつた時に、特に此の兩様の首を必要とした事實があつたのである。そして偽の首は西湖の湧金門外に梟らし本物の方は南京の牙城に態々持つて行かせたのである。無論湧金門外のそれをも夏超其の人の首であると天下に公表し且つ自ら督軍と僭する如き者は斯くの如くすべてやつつけてしまふものであると云ふ精神を示したものであつたのである。

百八 青龍刀を鬻ぐ玩具店の賑ひ

支那城内に遊び戯臺に武劇を見てゐると、鬻武者の豪の者が、舞臺面に堂々たる姿を現はし手に長柄の青龍刀を提げ、立ち廻り勇しく切つて廻る場面の賑かに演ぜられてゐるのを眺める。或は又親の仇を取るべく城門の上に身をひそめ、敵軍の近く押し寄せるのを狙ひ御曹子の君が樓城を背景に之を邀撃して遂にあつばれ遺恨をはらせたと云つた芝居などにいつもその花形役者の鬻す武器はと云へばこの青龍刀に限つてゐるのである。それ故支那芝居に出て来る武劇用の兇器と云へば青

龍刀がおきまりの相場である關係上支那民衆の頭には、青龍刀と云へる名が親しみを持つて連想されてゐるのである。

本來武器として、又刑刀としての青龍刀はいかなる切れ味のするものであるかと云ふと多くは比較的鈍刀の方であつて、而かもその重みが相當にあるその爲め取扱ひ難い様に見える。さうしてその柄と云ふが可なり長い方である。普通芝居なんかに見るやうな輕快で取扱ひ易いものとは大いに趣を異にしてゐるのである。

斯くの如く支那では古來民衆的に人氣を集めてゐる青龍刀のことであるからその刀の蔭に隠れて行はるゝ社會相には色々變つた事がある。わけても支那社會相の暗黒面を細大となく物語れるものはこの青龍刀の右に出るものはあるまい。又事實この青龍刀に依つて各種の秘密、敵討ち等の興味ある挿話、話題が導き出されてゐるのである。従つて、青龍刀に集まる支那民衆の人氣と云ふものは非常なものである。大人となく子供となく、古來青龍刀は天下の芝居がかつた興味を引き寄せてゐる丈の力を有してゐる。此の間の消息を見てゐると云ふと、罪に問はれた大官連中の刑罰を受け

るときであるとか其の他新聞で書き立てられた有名な將軍連中の斷末魔であるとか云ふものは大抵この青龍刀に依つて美化し色彩を添へてゐるのである。そこで評判になるものだから處刑場には必ず附き物として誰しも土産に買つて歸ると云つたやうな五彩で色どられた青龍刀の玩具が列べられてゐる。殊に金銀、紅緑のきらびやかなものでその恰好は豊かな繡房の毛の飾られた物が店頭に見えてゐる。之を求めたなら素人芝居的一幕も打つて振り廻はして見たいと思はせる様に出來てゐる。それ故處刑場に堵列を作つてゐる民衆どもは子供の土産にと云ふ許りでなく、其の日の話題の參考にと買ひ求めるのである。なほ青龍刀の玩具は、斷末魔に於ける處刑場に賣つてゐる許りでなく、北京、天津、上海等の勸工場くわんこうじやの玩具店に見つて行ても、各種の藝術的に出來た參考品が、あまた値安く陳列されてゐる。其の形式も各種各様で様式には支那らしい凄味のあるものもある。日本の子供が大將ごつこをする時に使ふ大小色々の刀の程度の比ではなく、支那の刀の玩具は頗る複雑でもあり又大陸的でもある。その大まかな所に一層力強いところを見せてゐるので面白く出來てゐると思ふのである。

尙序でながら同じ刀を持つ日支兩國の子供たちの遊びかたを見て居ても日本の子供であると大將ごつこ、いくさごつこと云つて戦争の眞似をする、ところが支那の子供はすぐ刀を持たせると芝居の眞似をするのである。これほどこの兩者の間には頑是なき子供の心理の上にも差等のあることを見るのである。青龍刀を見ても遊び気分、死刑を見ても芝居気分と云つた呑ん氣な氣持ちのしてゐるところは支那の人々に争はれない處である。

百九 北京歴史博物館に見る大青龍刀の血痕

支那四百餘州の中で、吾人の遊歴中これまで見た偉大なる青龍刀と云ふのは少ないが、今日現存せる物では北京の紫禁城午門の樓上、歴史博物館の刑具の部に見るそれであらう。親しく之に觸れて見るとそれは古代の大刀であり其の身は殆んど全體に錆びがまはり、茶褐色に黒味を帯びてゐるばかりでなく血痕を各處に見せ、見るも恐ろしい聯想を起させるのであるが、身の幅三四寸、たけ六尺に達するの逸物である。その場所に臨み之を振り翳すと云ふ丈でも、腕に却々の膂力を要するも

のと物凄く感ぜられたのである。恐らく獄吏にして斯う云ふ青龍刀をよく使ひこなすことの出来る者は山東人か何かで偉大な骨格の持主で筋肉のよく發達した者でなければ、振り上げた青龍刀は却つて獄吏自身の身を殺すに至るかも知れない。

古來、快刀亂麻と云へる言葉もあるが、偉大なる體格の持主でない限りは、到底鮮かに之を用ひこなすことは困難な譯であらうと思ふ。此の午門に陳列された青龍刀を見た者は、必ずや支那四百餘州の國家を統治せんとする者は須らく此れ位の大刀を用ひこなせる丈の腕力と、膽力とを有するに非ざれば到底難かしいものであると云ふことを、深刻に感ぜしめられたであらう。此の青龍刀の底力の有無如何に依つて天下亂れるも、亂れざるも、實に此の名刀一つにあつたと云ふ風に考へられたことであらう。吾人はこゝに此の大刀を振り上げた獄吏の場面を想ひ、又其の刃に残る血痕の凄味深きところを見て、轉た其の意味深長なものがあることを思ふのである。

支那民族の歴史的暗黒面は見たによつては實に掛つて此の青龍刀の用ひ方一つにあつたものであると斷定しても憚らないのである。然かし民國の統治が軍閥政治から民衆政治に變はつて居るに

政治の運用上を不幸にして青龍刀の底力が裏面に光つてゐなければ支那と云ふ國が容易に治まつて行かないやうでは困る。その間緩急宜しきを得なくては到底あれ丈けの大きな國士だから萬民を率ゐて行くわけにはいかないだらうが、世は進んで大刀などの無用な時代になつてほしいのである。その大刀なり短銃なりはその止むを得ない場合に支那統治上或る程度まで必要なものとなしそれ以上は人情味と民族の自覺で行き所謂民族、民権、民生の三民主義の大目標で進むところまで進めて行き、吾人東亞の隣人もそれが實現を助力するやう心掛けたいと思つてゐるのである。豈、いつまでも青龍刀を齧して辯を好む如き時代おくれの愚を學ぶものであらうか。

青龍刀 (終)

時局に對する歲末の感

青龍刀に被ぶれてお隣の支那が大刀短銃でなくては治まらぬとか出兵でなくちや押へが付かぬとか考へられては溜らぬ。青龍刀や出兵を超越して支那の水村山郭には春風の如き情味が漾ひ千古の隣人愛が漲つてゐる。徒らに暗い半面のみには囚はれて明るい人間味の動いて居る大局を見ず之と腹で交はる丈の襟度と暖か味のないものは遂に日本を世界の舞臺から孤立の位置に陥れる近眼者流であるやうな氣がしてならぬ。

本書の参考となるべき同著者の著述

書名	定價	出版元
支那文化の研究	(5.50)	富山房
支那の社會相	(5.50)	雄山閣
支那風俗の話	(2.80)	大阪屋
支那趣味の話	(3.00)	大阪屋
お隣の支那	(1.80)	大阪屋
支那料理の前に	(1.80)	大阪屋
長城の彼方へ	(0.85)	大阪屋
支那文化の解剖	(3.50)	大阪屋
支那那游記	(3.50)	春陽堂

(絶版)
(絶版)
(絶版)

文字の研究	(4.50)	時價 (25.00)	成美堂
文字の沿革(一般)	(4.50)		日本大學(嚴翠堂)
文字の沿革(建築篇)	(2.00)	(絶版)	成美堂
漢字音の系統	(1.50)	(絶版)	六合館
文字の教へ方	(1.50)	(絶版)	二松堂
文字の訓練	(1.50)	(絶版)	泰山房
明治の漢字	(1.50)	(絶版)	寶文館
漢字の活用	(1.00)	(絶版)	六合館
現代支那語學	(0.55)	(絶版)	博文館
言語學(上、下)	(1.10)	(絶版)	博文館
線音双引、漢和大辭典	(2.70)	(絶版)	東雲堂
標準字典	(2.20)		中興館

支那行脚記	(2.90)		萬里閣書房
支那綺談、阿片室	(2.50)		萬里閣書房
支那國民性講話	(1.00)		日本大學(嚴翠堂)
支那今日の社會と文化	(0.50)		大日本文明協會
日本より支那へ	(0.50)		北隆館
支那の田舎めぐり	(0.50)		北隆館
歡樂の支那	(0.50)		北隆館
長久の支那	(0.50)		北隆館
不老長生	(0.50)		北隆館
老朋友	(0.50)		北隆館
創造の支那	(0.50)		北隆館
支那地圖	(1.00)		神谷書店

支那禮讚、五味八珍
眠れぬ獅子

(近刊)
(近刊)

萬里閣書房
萬里閣書房

昭和三年十二月五日印刷 昭和三年十二月三十日五版

昭和三年十二月十日發行 昭和四年一月五日六版

昭和三年十二月十五日再版

昭和三年十二月二十日三版

昭和三年

定價二圓三十錢

青龍刀 與附

著者 後藤朝太郎

發行人 小竹即一

印刷人 豊盛堂印刷所



不許複製

發行所

東京市日本橋區通二丁目
振替口座東京七七二〇番

萬里閣書房

萬里閣書房發行書目録

後藤朝太郎著	支那行脚記	總布木版七度刷裝 四六判四七〇頁	定價 二・九〇 送料 一・四〇
坂正臣校閱	明治大正勅題歌集	紫羽二重表紙上製 四六判三八三頁	定價 二・三〇 送料 一・二〇
永井柳太郎序	帝國議會雄辯史	脊皮クロース上製 四六判六〇六頁	定價 二・八〇 送料 一・四〇
鳥居龍藏著	滿蒙の探查	總布ホブリン装 四六判五五〇頁	定價 三・五〇 送料 一・四〇
鳥居幸子著	小さき家の装ひ	總布金箔入上製 四六判二七八頁	定價 一・五〇 送料 一・〇〇
後藤朝太郎著	支那阿片室	鳥ノ子木版七度刷裝 四六判五〇〇頁	定價 二・五〇 送料 一・二〇
生方敏郎著	食後談笑	鳥ノ子木版八度刷裝 四六判六四〇頁	定價 二・九〇 送料 一・四〇
清澤洵著	黒潮に聴く	總クロース金文字入 四六判六〇〇頁	定價 二・八〇 送料 一・二〇
メイ・牛山著	近代美容法	總クロース上製 四六判三三六頁	定價 一・八〇 送料 一・二〇
東京日日社編輯	戊辰物語	鳥ノ子木版十度刷裝 四六判三六二頁	定價 二・〇〇 送料 一・〇〇

萬里閣書房發行書目録

工學博士 伊東忠太著	木片集	鳥ノ子木版六度刷裝 四六判五八〇頁	定價 三・〇〇 送料 一・四〇
山路愛山著	山路愛山選集 第一卷	脊皮クロース金文字入 四六判七三六頁	定價 三・〇〇 送料 一・六〇
山路愛山著	山路愛山選集 第二卷	脊皮クロース金文字入 四六判七二六頁	定價 三・〇〇 送料 一・六〇
山路愛山著	山路愛山選集 第三卷	脊皮クロース金文字入 四六判七五四頁	定價 三・〇〇 送料 一・六〇
法學博士 信夫惇平著	明治秘話 二大外交の真相	總クロース金文字入 四六判五二八頁	定價 二・〇〇 送料 一・二〇
柳原白蓮著	筑紫集	鳥ノ子木版廿度刷裝 四六判五四〇頁	定價 二・五〇 送料 一・四〇
櫻井大路著	人相の秘鍵	總クロース金文字入 四六判四四四頁	定價 二・〇〇 送料 一・二〇
子母澤寛著	新選組始末記	鳥ノ子木版八度刷裝 四六判四三四頁	定價 二・〇〇 送料 一・二〇
酒井勝軍著	橄欖山上疑問の錦旗	總クロース金文字入 四六判四四四頁	定價 二・〇〇 送料 一・四〇
理學博士 石川千代松著	人間	總布木版五度刷裝 四六判五三〇頁	定價 二・五〇 送料 一・四〇

萬里閣書房好評書目

宮田孝次郎著	佳味飯之漬物嘗物三種	總布木版數度刷裝 四六判二六〇頁	定價 一・〇〇 送料 一〇〇
酒井勝軍著	神州天子國	鳥ノ子木版六度刷裝 四六判五六二頁	定價 二・五〇 送料 一四〇
武井武雄著	武井武雄手藝圖案集	總布金箔入上製 キ夕判二二〇頁	定價 二・五〇 送料 一四〇
江原小彌太著	命經	總布木版數度刷裝 四六判五七〇頁	定價 二・五〇 送料 一四〇
小野賢一郎著	陶器を中心に	鳥ノ子木版八度刷裝 四六判四三四頁	定價 三・〇〇 送料 一四〇
星野竹里著	貯金玉 牧野 ニコノ成功譚	總布木版四二二頁 四六判四二二頁	定價 一・五〇 送料 一〇〇
河原萬吉著	日本情痴集 室町鎌倉篇	總布木版數度刷裝 四六判五四四頁	定價 二・〇〇 送料 一四〇
高村光雲著	光雲懷古談	近刊	
門脇陽一郎著	戲曲 お坊ちやん	近刊	
米澤順子著	長篇小説 毒花	近刊	

Fuzambō
TOKYO



